魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～

ムラサメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～

【Ｎコード】
Ｎ９３３２Ｓ

【作者名】
ムラサメ

【あらすじ】
フォルテは電脳世界でロックマンに敗北をする。フォルテはなぜ自分が敗北をしたのかという理由がわからずにいた。
フォルテは塵際にそんな絆の力を超える力を手に入れてやると言って電脳世界から完全に消えた。
フォルテが次に気づいたのは死んだネットナビが眠る墓の狭間にいてセレナードと出会う。

フォルテとセレナードは共に人間のいる世界に行く。
電脳世界とは違って現実世界でフォルテは人間と出会う。
人間を酷く嫌うフォルテはどうするのか？
人間を抹殺するのか？
人間を信頼するのか？
その答えはフォルテ自身もわからない。
魔法少女リリカルなのは×ロックマンエグゼとのクロスオーバー小説始まります。

第1話　電脳の破壊神消える（前書き）

ムラサメ
「ようやく始まる第2弾小説」

ロックマン
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士始まります」

第1話　電脳の破壊神消える

電脳世界の奥深くで二体のネットナビの激突をしていた。

「アースブレイカー！！」

フォルテは右腕にエネルギーを纏わせて白いビームを青いネットナビめがけて放つ。

「くっ！！」

『ロックマン！！』

青いネットナビロックマンはフォルテのアースブレイカーを喰らってしまう。

「バトルチップ！リカバリー２００！！スロットイン！！」

チップみたいに小さなカードをペットにインストールした。

「大分楽になった」

どうやら、先ほどの回復で大分楽になったみたいだ。

「一気に決めるぞ！！バトルチップ！メガキャノン×３トリプルスロットイン！！」

「プログラムアドバンス！！ギガキャノン３！！」

ロックマンの腕がキャノン砲に変わりフォルテ目掛けて放つ。
フォルテは電脳獣ファルザーの小型版にしてから強力な風を放つ。
「ファルザーストーム！！」
フォルテのファルザーストームとロックマンの放つキャノン砲がぶつかりあう。
周りの電脳空間が歪ませるほどの威力だ。
次第にフォルテの技が徐々に押され始めた。
（馬鹿な……なぜ、こんな奴ごときの力に敗れただと！？）
フォルテの知らない力に押され始めキャノン砲が直撃する。
「これで終わりだ！！」
ロックマンはフォルテのナビマークをギガキャノンで貫く。
「なぜだ……力では……完全にオレが上のはずだ。なのに……なぜ、オレは貴様ごときに負ける？」
「フォルテ……確かに力ではフォルテが完全に上だ。でも、想いや絆を知らないフォルテが想いや絆を知るボクには勝てない……」
「想いや絆だと？そんなのただの戯れ言にしか過ぎない……」
フォルテはまるでそれを否定しているかのようだ。

ロックマンは否定しない。

「確かにフォルテの言う通り想いや絆の力は全く関係ないけどそれがボクを強くしている」

「それが……貴様の力の源か……」

フォルテはロックマンの力の源は想いや絆の力だと理解する。

「そうだね、ボクにはあってフォルテにはないのはその想いや絆の力」

ロックマンは満身創痍になりながらも話し続ける。

「想いや……絆の力……か……覚えておけ。そんなモノを超える力をオレが……手に入れてやる……

いつか……必ず貴様の力を……超える力を……手に入れる」

フォルテはそれを残して電脳世界から完全に消えた。

「ようやく……フォルテを倒した」

ロックマンはフォルテを倒したことで気が抜けていた。

『確かに危なかったな……あと少しでこちらの負けもありえた』

オペレーター自身も冷や汗を流していた。

「もし、フォルテが想いや絆の力を知っていたらボクは負けていた

……」

『ロックマン……今はくよくよしても始まらない……次フォルテと対決するときにはオレ達はもっと強くなっている……』

「そうだよね……熱斗君の言う通りボクは熱斗君がいる限りもっと強くなれる」

ロックマンは先程まで不安だった目からもう迷いはない。

ロックマンは電脳世界からプラグアウトした。

第1話　電脳の破壊神消える（後書き）

ムラサメ
「フォルテが敗れました」

ロックマン
「そうだね……本当に危なかった……」

熱斗
「本当にな……ところでオレ達の出番は？」

ムラサメ
「あるわけないじゃん？この一話だけで後は出番はない。それがどうした？」

熱斗
「ふざけるな！！オレは主人公だ！！」

ムラサメ
「実際は主人公だが……今回はフォルテが主人公だ。それじゃあ」

作者はスイッチを持つ。

ロックマン
「熱斗君……嫌な予感が……」

熱斗
「オレも……」

ムラサメ
「じゃねーーーーー」

作者はスイッチ押した。

熱斗・ロックマン
「「作者ーーーー！！覚えていろーーーー！！」」

熱斗とロックマンは次元の穴に落ちる。

穴は元に戻る。

ムラサメ
「これで原作主人公は消えた」

フォルテ
「人間と哀れなネットナビが消えたか……」

ムラサメ
「後はキミ次第だ」

フォルテ
「そうか……」

ムラサメ
「連載を早めてしまい、申し訳ありませんでした。これからも魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～の方も宜しくお願いします」

フォルテ
「……」

ムラサメ
「あの～話さないんですか？」

フォルテ
「話す意味がない上、オレが人間を信じると思ったか？」

ムラサメ
「ですよねー」

フォルテ
「……」

フォルテは無言で退場する。

ムラサメ
「次回は「電脳の狭間での出会い」です。タイトルは変わりますが宜しくお願いします」

フォルテのキャラ設定（前書き）

今回はフォルテ編です。
フォルテのキャラ設定を載せました。
フォルテのことが一部わかると思います。

フォルテのキャラ設定

フォルテ

容姿　紅き鋭き眼光をしてヘルメットの中央にはクリスタルがある。
耳は青い球体がある。
マントを身に纏っている。
マントの下には黒のボディに紫のギザギザラインが入っている。
胸の部分は斬られた跡がある。
全体的に黒と黄色を基調としている。

ヘルメットを取ると黒い髪が腰辺りまで伸ばしている。

性格　　冷静（冷酷）で戦うことを求め続ける。

設定

本作の主人公。

人間によって生み出された世界初完全自律型ネットナビ。

かつては人間の一部を信頼していたが危険過ぎる存在だと言われ科学者達から抹殺の対象となる。

それをきっかけに人間を完全に信頼せずに人間をクズ扱いする。

人間に対しては残酷な性格。
特に科学者といった人物を酷く嫌う。
その後彼の経歴を知る人物は誰もいない。
裏世界でもフォルテのことを知るものがほとんど存在せず裏世界のネットナビから黒き破壊神（伝説）と呼ばれ裏世界では噂になる。
またゲットアビリティプログラムを備わっている。

一人称　オレ

二人称　貴様

能力

フロート
浮くことが出来るが空は飛べない。
スピードは神速クラスに速く残影が残る程の速さ。

ゲットアビリティ
フォルテが敵の情報を見てそれを自らの能力に使うことが出来る能力。

ダークネスオーラ
フォルテのマントから発生する漆黒の防御バリア。
ありとあらゆる攻撃を全て防ぐバリア。

必殺技

バスター

フォルテの腕をバスターに変えてから敵を射つ。貫通力はない。

エクスプロージョン

バスターをチャージしたフォルテの攻撃。

一秒間に5発以上高速に発射する。威力はバスターの数倍で貫通力は遥かに高い。

アースブレイカー

エネルギーを集中させる技。

フォルテが最も使う技の一つ。

威力は一撃でクレーターが出来るほどの威力。

ネオバニシングワールド

バニシングワールドの強化版。

狼型ネットナビゴスペルを小型版に変えた。

ゴスペルの口から黒き黒炎を放つ。

その威力は世界を一瞬で消し去ることが出来る程の威力。

ヘルローリング

漆黒の球体を二つ作り上げて敵に放つ。

自動追尾が出来る便利な技。逃れる術はない。

ダークアームブレード

手を長剣に変えて斬る漆黒の剣。

ダークネスオーバーロード

闇の力を纏った極太い漆黒のレーザーを放つ。威力はフォルテの必殺技の中では最強クラス。バリアで防ぐことは不可能。

ファルザーストーム

腕を電脳獣ファルザーに変えて風の砲撃を放つ。威力は今までの必殺技の中で遥かに高い。

フォルテ専用のサポート獣

ファルザー

かつては電脳世界の全てを切り裂く翼と呼ばれた大型の紅き怪鳥。

その強さは電脳獣グレイガと互角な強さ。

察知能力や光学迷彩を見抜く等といった能力だけではなくフォルテとビーストアウトをすることで電脳獣ファルザーの力を使用可能。

後はゴスペルといった大型の狼型ネットナビもいる。

フォルテ専用の電脳獣である。

ゴスペル

電脳世界の全てのバグの欠片を集合体させた大型の狼型ネットナビ。

フォルテ専用の召喚獣で単体としても戦うことが出来る。

強さは並のネットナビよりも遥かに強く、人間では手につけられず、主君であるフォルテしかなつかない。

形態変化

フォルテファルザービースト

電脳獣ファルザーの力を身に纏った姿。

強さは闇の力が生温く思えるほどの強さ。

フォルテ自身も切り札クラスなため滅多に使わない。

フォルテGS

ゴスペルのバグを覚醒してフォルテと融合した姿。

マントはそのままだが全体が漆黒を基調とする。

身体能力や技の威力は通常よりも高い。

電脳獣ファルザーは召喚して戦わせることは出来るがゴスペルを使うときは電脳獣ファルザーの力は使うことが出来ない。

フォルテのキャラ設定（後書き）

ムラサメ
「まあ……大体のキャラ設定ですね」

フォルテ
「そうか……」

ムラサメ
「こんなので大丈夫か？」

フォルテ
「知るか」

第2話　電脳の狭間での出会い（前書き）

ムラサメ
「フォルテは敗れてしまい漆黒の空間に来てかつてはフォルテを倒したネットナビと出会う」

フォルテ
「ロックマン以外か？」

ムラサメ
「それ以外はいないだろうな？」

フォルテ
「奴か……」

ムラサメ
「アイツです」

フォルテ
「下らない……始まるぞ……」

第2話　電脳の狭間での出会い

フォルテはロックマンとの戦いに敗北をして完全に消えたはずだった。

「どこだ？ここは……」

フォルテは漆黒の空間にいた。

まず、フォルテはロックマンにデリートされたはずなのに体の傷がなくなっている。

フォルテは何者かの気配に気付く。

「あなたまで来てしまったのですね……」

後ろに二枚の羽衣が特徴で黒いボディと黒と黄色を基調としていて少し浮いているネットナビが漆黒の空間いた。

「貴様はセレナードか。なぜここにいる？」

裏世界最強と呼ばれたセレナードが漆黒の空間にいた。

「あなたは、やはりロックマンに負けたのですね」

「セレナード……貴様ロックマンを知っているのか？」

「知っていますよ。私も彼に会ったことがあるのですから……」

「貴様でも会ったことがあるとはな……」

フォルテはセレナードロックマンに会ったことがあることを鼻で軽く笑う。

「ここは、デリートされたネットナビ達が必ず来る場所。簡単にいえば墓場みたいな場所ですね」

「墓場か……死んだオレと貴様がここに眠るにはうってづけだな」

「そうなりますね……でもまだ完全に私とフォルテは死んではいない」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味です。このまま、朽ち果てるのなら朽ち果ててもいい。生きるか死ぬかはあなた次第だ」

セレナードはフォルテに生きるのか死ぬのかを求める。

「オレは……」

フォルテは迷っていた。

自分の宿敵ロックマンに敗れてデリートされた。

その時に、フォルテ自身の乾きや飢えは消えている。

フォルテは宿敵ロックマンを殺すために今まで生きてきた。

フォルテの答えは……

「生きてやる……この手で人間を抹殺させてロックマンも破壊する」
フォルテは強く拳を握る。
拳には闇の力を纏っている。
「決まりですね。私もあなたと共に行動をします」
「なぜ貴様とともに行動をしなければならない……」
フォルテはセレナードと共に行動をすると聞いて不機嫌になる。
「今は亡きあの人物からの伝言だからです。『フォルテを頼む』と」
「科学者の連中か……はっきり言って不愉快だ」
セレナードの伝言を完全に無視していた。
フォルテが人間を憎んでいるが特に科学者を酷く嫌う。
「いいだろう……貴様の自由にしろ……」
「私の好きにさせていただきます」
フォルテとセレナードは漆黒の空間とは反対の光の空間に行った。
これが、フォルテとセレナードの新たな始まりを意味する。
「……」

フォルテは電脳世界では見なかった青空を見ていた。

「異世界の地……ですね」

セレナードは静かに呟いた。

「アルフ……あの人達誰だろう？」

「取りあえず管理局の人間には見えないね」

「申し訳ないけど、捕まえよう」

アルフとフェイトは遠くからフォルテとセレナードを見て捕まえようと考えていた。

「敵か……」

フォルテとセレナードは敵の気配に気付いた。

「ごめんなさい……」

フェイトはフォルテとセレナードを攻撃する時に既に二人はこの場にいなかった。

「ふん……雑魚が」

フォルテはフェイトの攻撃をマントから発生した黒いバリア（ダークネスオーラ）でフェイトのデバイスバルディッシュの攻撃を防いだ時にフェイトは驚愕の表情をする。

「防御魔法！？」

「人間だと？面白い……ここで破壊する！！」

フォルテは人間に驚きはしなかったが、バリアを解除して右手にエネルギーを溜める。

（アルフ……私は終わりだね）

フェイトは諦めかけた。

「もらった！！」

アルフはセレナードが動いていないから勝てると思った。

「こんな程度か……」

セレナードはアルフの攻撃を目を閉じて防いだ。

「こいつ……強い！！」

アルフはセレナードが浮いて動いていなくしかも目を閉じて防いだ。

「あなた達はいったい誰ですか？」

セレナードはフェイト達に名乗る。

「私は、フェイト・テスタロッサ」

「私はアルフ、フェイトの使い魔だよ」

「私は、セレナード」

「……フォルテ」

それぞれの自己紹介が終わる。

「ここはどこですか？」

「海鳴市という街ですけど……海鳴市を知らないんですか？」

「知りませんね、聞いたことがないのですから……」

セレナードとフォルテは人間の世界など知るよしもない。

「フェイト……あいつら次元漂流者じゃないのかい？」

「次元漂流者？」

フォルテは聞かない言葉に疑問に思う。

「次元漂流者は次元を超えて別次元に来て何らかの理由で来てしまった人達のことだけど……この人達は次元漂流者ではない……」

「どういう意味だい？」

フェイトの発言に疑問に思うアルフ。

「よくわからないけどまるで、自分達の意思でこの世界にたどり着いたという感じだから……良ければ来ませんか？」

「どうしてですか？見ず知らずの人を簡単に連れ込んでもいいのですか？」

セレナードはフェイト達に来ていいのかを聞いた。

「構いませんよ、私達も二人より四人いたほうがいいのですから」

フェイトは笑顔になった。

セレナードはフォルテに視線を送る。

「……好きにしろ」

フェイト達は空を飛んで移動した。

フォルテとセレナードはフロートを使い移動する。

「ここが、あなたが暮らしている部屋なんですか？」

セレナードはフェイトが暮らしているマンションを見ていた。

現実世界を知らないため多少不思議に見えた。

「そういえばフォルテは？」

「マンションでフェイトの部屋についたら『人間と馴れ合う気はない』と言葉を残して別行動をしています」

「そうですか……」
フェイトは少し残念そうな表情をする。
人間を嫌うフォルテにとって人間と生活をすることは不愉快だろう。
「ご飯できたよー」
フェイトは簡単な食事を作った。
「セレナードさんは食べないのですか？」
「私とフォルテは人間ではないのでフェイト達が食べてください」
「人間ではないってどういうことだい？」
アルフとフェイトはセレナードに聞いた。
「私とフォルテは『ネットナビ』と呼ばれる電脳体です。なので、人間の食べ物を食べなくても生きることが出来るのです」
「ネットナビか……凄いですね」
フェイトはセレナードの説明でネットナビが何なのかがわからないが凄いということはわかる。
「それからアルフ？」
「なんだい？」
「それドッグフードですよね？」

「ドッグフードだけど、どうしてだい？」

セレナードはアルフの食べているドッグフードを見る。

「狼はドッグフードを食べないのでは？あなたはもしかして犬ですか？」

「私は狼だ！！」

セレナードはアルフを犬として見ていたがアルフは狼だという。

「狼ならドッグフードを食べないのにアルフはドッグフードを食べています。そのことで既に説得力が感じられないのですが？」

「別にいいじゃないか！！狼がドッグフードを食べても……」

アルフは顔を真っ赤にしてからドッグフードを食べる。

セレナードはフェイトの食事を見る。

（育ち盛りの少女が冷凍食品しか食べていない……）

冷凍食品は手頃で食べられるが育ち盛りの少女が冷凍食品を食べることは余り成長に宜しくはない。

セレナードは考えていた。

（フェイトには家族がいない……）

たった一人で食事をしているフェイトを見てセレナードはどこか悲しい表情になる。

第2話　電脳の狭間での出会い（後書き）

ムラサメ
「後書きコーナー！！」

フォルテ
「……」

セレナード
「どういうことですか？作者さん？」

ムラサメ
「何かをやりたいからさただしてみただけさ」

セレナード
「……」

フォルテ
「……」

ムラサメ
「黙りですか？」

セレナード
「仕方ない作者さんですね……次回は願いが叶う石です。次回も宜しくお願いします」

第3話　願いが叶う石（前書き）

ムラサメ
「第３話を投稿した」

フォルテ
「話すことはそれだけか？」

セレナード
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第3話　願いが叶う石

フェイト達は家で準備をしている。

「何をしている？」

「これからジュエルシードと呼ばれる宝石を回収するよ」

「ジュエルシード？」

セレナードは聞いたことがない言葉に疑問に思う。

フォルテも一応聞いている。

フォルテとセレナードは電脳世界ではプログラムと呼ばれる物しか知らないため現実世界のことは余り知らないみたいだ。

「ジュエルシードは全部で二十一個それを集めると願いが叶うって」

「誰かの頼まれごとでしょうか？」

「母さんが集めるように頼まれたけど、これがジュエルシード」

フェイトは青い宝石を見せた。

「……人間はそんなグズな物しかもたった石ころみたいな価値もない物を集めるのか……」

フォルテは容赦なき一言を放つ。

フェイトは震えている。

「フォルテ……言い過ぎだよ！！」

アルフはフォルテに怒鳴るもフォルテは怪訝そうな表情になる。

「事実を伝えただけだ。そんな下らない物で願いが叶うほど甘くはない」

フォルテはフェイト達から離れた。

「何でだよ……！！あの子が集めていることを馬鹿にした言い方！！」

アルフはフォルテの態度に怒りを覚える。

（フォルテはかつて人間に酷いことをされた経歴がある……だから人間の優しさを知らない）

セレナードはフォルテの知っているが全ては知らない。

「……」

フォルテはフロートを使いながら人間のいる世界を見る。

「あれが人間の姿か……下らない」

あちらこちらで騒いでいたりワイワイ喋っていたりとにかくうるさいことや目障りな存在だとフォルテは思う。

フォルテは再び移動を開始するも敵の気配に気づいた。

「……出てきたらどうだ？そこで姿ごと消している奴？」

「気づいていたか？流石は伝説と呼ばれたネットナビ」

フォルテの気配からランプみたいな電気を放出しているネットナビが出てきた。

「オレはフラッシュマン！！貴様の実力を確かめさせてもらうぞ！！」

フラッシュマンは電気を放った。

「……ザコに言われる筋はない」

フォルテは冷静にフラッシュマンを馬鹿にする。

「ネオンライン！！」

フラッシュマンは球体を作り上げてからフォルテを狙う。

「こんな程度か……」

フォルテはつまらなさそうにバスターでネオンラインを破壊する。

「スパークアームブレード！」

フラッシュマンの腕を剣にしてからフォルテを斬る。

「遅すぎる……消えろ」

フォルテは楽々とそれを避けて右腕にエネルギーを集中させる。

「アースブレイカー！！」

フォルテはアースブレイカーを放ちフラッシュマンに直撃する。

「申し訳ありません……マスター！！！！」

フラッシュマンは消え去った。

「……」

フォルテは再びフロートで移動をする。

～研究所～

研究所には老人みたいな男性とフォルテと同じネットナビがいた。

「フラッシュマンがやられたか……所詮捨て駒にすぎん」

「どうするのですか？ワイリー様？」

「今ワシが開発しているアレが完成しておらん……まだ動く必要は

ない……」

ワイリーは今はパソコンを使い何かの研究をしている。

後ろの研究を見たら何かゴスペルに似ている部分がある研究をしている。

所変わって栗色の髪をしてツインテールをしている少女とフェレットみたいな動物が森で猫を見ていた。

「ユーノ君……猫は大きかったっけ？」

「恐らく……大きくなりたいとジュエルシードに願ったから？」

ユーノの補足でため息を吐くなのは。

「とにかく……結界はあそこまで持たないから早めにジュエルシードを回収しないと……」

ユーノとなのはがレイジングハートを起動させてから猫を何とかしようとした時に何かが猫に直撃する。

「ニャ！？」

猫は衝撃を受けた。

「……私と同じ魔導師？でも譲れない……」

フェイトはなのはを見据える。

「フォトンランサー！」
フェイトは魔力弾を連続でヒットさせる。
猫はそれに構わず突っ込んでくる。
「ホーリーブレイカー！！」
セレナードはエネルギーを集中させて猫に直撃させる。
猫はホーリーブレイカーの威力が大きすぎて倒れる。
倒れた辺りからジュエルシードが出る。
ユーノ達は出るもアルフが遮る。
セレナードは浮きながらなのは達を見据える。
「力無き者よ。立ち去るがいい……」
人数は二対二だが実力の差が余りにもありすぎる。
なのはとユーノは冷や汗をかいている。
「ジュエルシードは回収したよ」
「しまった！？ジュエルシードが！？」
ユーノはセレナードの威圧感に圧倒されてからジュエルシードの回

収を忘れていた。

「退散しますよ？二人とも？」

セレナード達は風の如く立ち去った。

なのは達は呆然とその姿を見ていた。

第3話　願いが叶う石（後書き）

セレナード
「そろそろ私のキャラ紹介をして欲しいのですが……」

ムラサメ
「フォルテはしたからな……セレナードもするか……」

フォルテ
「そうか……」

ムラサメ
「次回は海鳴温泉辺りをしたいと思います。
次回も宜しくお願いします」

セレナード設定（前書き）

セレナードのキャラ設定です。

セレナード設定

セレナード

容姿　黒い目と黒いボディで全体を黒と黄色を基調としていている。
ヘルメットを取るとクリーム色の長い髪。
後ろに二枚の羽衣がある。

設定

いつ誰が作り上げたのかは全くわからない女性型ネットナビ。
実力は裏世界Ｎｏ．１を誇りかつては最強と呼ばれたあのフォルテを倒したことはあるほどの実力。

一人称　私

二人称　あなた

性格　優しく敬語で話したりして女性みたいな性格をしたりしている。

フォルテほど冷酷ではない。

ただし、戦いの時や敵には敬語になる時もあるが基本的には敬語ではない。

必殺技

リフレクト
二枚の羽衣で相手の遠距離の技をそっくりそのままの威力で跳ね返す。

ホーリーブレイカー
フォルテのアースブレイカーと似ている。

エネルギーを集中させて放つ。

シャイニングバリア
セレナードの専用のオーラ。
光のバリアで大抵の技は全て防ぐことが出来る。威力が高すぎたりしたら壊れてしまう。また結界として敵を技を封じることも出来る。

アルカディアスブレード
白金の長剣を二刀流出して敵を斬る。

シャイニングオーバーロード

セレナードの手に光の力を纏った技。

極太いレーザーを放つ。威力は全ての闇を滅する威力。

ヘブンローリング
光の球体を二つ出して敵に目掛けて放つ技。
自動追尾可能。

使役龍　ラグナロックス

漆黒を基調とした龍。

翼を使い電脳世界を飛び回っては燃やし尽くしたと言われる伝説の電脳龍。

体長は二メートル後半くらいでセレナードに慕っている。

普段は表に出ずに念話でセレナードの話を聞いている。

捜索が得意で光学迷彩の無効化や解析が主とする。

空を飛んで移動も可能だがセレナード曰く「ラグナロックスは使わなくてもいいのですが、どうしてもという時は力を貸してください」らしいなのでラグナロックスも念話程度で協力している。

一人称　我

二人称　お前

性格　　普段は大人しいが戦闘になると性格が変わる。

必殺技

ウィングストーム

翼を使い風を作り上げてから敵に攻撃する。

威力は高くはないがバリアやオーラといった防御壁を確実に破壊する効果がある。

ウィングブレード

翼で敵を斬る。

インフェルノ

口から火炎を吐く。

その威力は周りを一瞬で焼け跡にすることが出来るほど。

フレイムウィングストーム

炎と風が混ざった技。
遠距離で多人数相手にも向いている技。

ボルテックス・インフェルノ

遠距離技で雷と炎を混ぜた技。

フロストストーム

氷の風を作り敵に攻撃する。

攻撃よりサポートに近い技。

セレナード設定（後書き）

ムラサメ
「ラグナロックスはオリジナルです」

セレナード
「どうしてですか？」

ムラサメ
「フォルテが二体も専用のネットナビがあるならセレナードもつけてみようかと」

セレナード
「そうですか……」

ムラサメ
「これから本編します。そして大丈夫かな？キャラ設定は？」

セレナード
「私に言われましても……知りません」

第４話　海鳴温泉（前書き）

ムラサメ
「……」

フォルテ
「反省しているのか？」

セレナード
「更新を遅れた理由は？」

ムラサメ
「太陽少年と暗黒少年を更新していたから」

フェイト
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第４話　海鳴温泉

フェイト達がジュエルシードを回収した翌日にはある場所に向かっていた。

「海鳴温泉？」

「うん。そこに日頃の疲れを癒すためだから……」

フェイトからもらった海鳴温泉の案内の紙と旅館をフォルテとセレナードは見ていた。

セレナードは多少興味があるのか説明と旅館を見ていたがフォルテはすぐに見るのをやめた。

「人間とは随分呑気な生き物だ。温泉に入り疲れを癒すための施設に足をわざわざ歩かせるとはな……」

フォルテは呆れながら温泉の案内と旅館を見てからの感想を言った。

「貴様らは温泉に入るのだろ？オレ達は旅館にいる」

「フォルテは入れないの？」

「元はネットナビですからネットナビが温泉には入りませんよ？」

セレナードはネットナビだから入れないと言った。

ネットナビが温泉に入ること事態はおかしいかもしれないからセレ

ナードとフォルテは部屋に残りフェイト達は温泉に入る。

フェイトとアルフは温泉に入りながら日頃の疲れを癒している。

「ごめんね……アルフにも疲れさせて……」

自分の目的のためとはいえ協力してもらうことには悪く感じる。

「私はフェイトの使い魔だよ？協力して当然さ……」

「うん……」

「フェイトや私やセレナードやフォルテは協力する気はないと思うけど……頑張っているよ……だから今はジュエルシードは考えなくてもいいよ……」

「アルフ……ありがとう……」

フェイトはほんの少し顔を赤くしてから協力をしてもらっているアルフに感謝していた。

「……」

「……」

フォルテとセレナードは無言にしてから旅館の部屋にいた。

「あの……」

「何のようだ？」

セレナードはフォルテを見ながら話しかける。

「フォルテ……忠告しておきますが、怒りと憎しみでは何も解決はしませんよ？」

「……それくらいわかっている……嫌という程奴に教えられた……」

「ロックマンですね？」

「……」

セレナードの一言にフォルテはイライラしていた。

「フォルテ……なぜあなたは人間を嫌うのですか？」

『主君……それは我も知りたい……我が力を奪いそこまでして人間を嫌う理由とロックマンと主君はどのような関係なのかを……』

フォルテの召喚獣ファルザーは召喚はしてはいないが念話で話を聞いていた。

「ロックマンはオレが認めた強者だ。それ以上でもそれ以下でもない……」

『主君が認めるほどの強さ……なら相当な強者だな。ロックマンは……』

ファルザーは納得していた。

セレナードも意外だった。

フォルテが認める強さに到達する相手がいたことに……

「だが……ロックマンだけなら余裕でロックマンを倒せるがロックマンは人間と手を組んでいる」

フォルテは忌々しげな口調になる。

「光　熱斗ですね。ロックマンの潜在能力を極限にまで引き伸ばすオペレーター。少なくとも私は認めていますよ？光　熱斗のオペレーターセンスを……」

セレナードは光　熱斗のオペレーターセンスとネットナビとのコンビネーションを認めていた。

『それより……主君……我は引っ込ませてもらう……』

ファルザーは消えた。

「フォルテ……別な場所へと行きませんか？」

「言われるまでもない……」
フォルテとセレナードは移動した。

夜になりフォルテとセレナードはフェイト達と合流する。
「あそこだよ」
フェイトは指をさしながらジュエルシードが川に沈んでいた。
「貴様らは何のためにジュエルシードを回収する？」
「母さんがどうしても必要だって、詳しいことは知らないけど……」
フォルテの問いかけにフェイトは知っている範囲で話す。
「私とアルフで回収するから……バルディッシュ起きて？」
『はい！！』
フェイトはデバイスバルディッシュを起動させた。
「私が封印するからバルディッシュとアルフはサポートして……」
フェイトの指示にアルフは頷いた。
フォルテとセレナードは離れた位置で見ていた。

「やはり来ましたね」

セレナードはその場で白の魔導師とフェレットを見ていた。

「キミ達は何のためにジュエルシードを集めているんだ！！危険な代物だぞ！！」

「何のため？危険でも現に奴が狙っているぞ？」

ユーノの叫びを嘲笑うフォルテ。

「そ……それは」

フォルテの言っていることは的確で何も言えなかった。

アルフは人型から狼に変わる。

ユーノはアルフの存在に気づいた。

「やはり……使い魔！！」

「使い魔？」

なのははユーノの言葉に疑問を持つ。

「使い魔とは魔力生命体。主の魔力を命とする。その代わり主の力と命を全力で守る」

アルフの説明を終えてからフォルテが無愛想な表情で

「どうするんだ？貴様らはオレを倒す勇気があるのか？」

「違うの！！私はただお話がしたいだけなの！！」

「人間はただ話し合うために武器を用いるのか？」

「そんなの……ただの屁理屈！！」

『その通りです』

なのははフォルテの言ったことに屁理屈だと感じてレイジングハートを起動させてから戦闘体制に入る。

「屁理屈は貴様らのほうだ。オレが出る必要はないな……アルフとフェイトでそこの雑魚を仕留めろ」

フォルテは怪訝そうにアルフとフェイトに任せた。

ユーノはなのはの援護に行くもアルフが遮る。

「互いにジュエルシードを回収する……つまり敵同士になる」

二人の魔法少女。

互いに同じ目的を持っている。

「違う！！そうならないために。話し合いは必要だと思う！！」

「話し合いでは何も……」

フェイトは静かに目を閉じてからデバイスを起動させる。

「解決しない！！」

フェイトとなのはの対決をするために戦いをする前に条件を出した。

「賭けるのは互いのジュエルシード一つずつ……」

なのはとフェイトの勝負は始まる。

しかしその勝負は一瞬で決まる。

フェイトのバルディッシュの刃がなのはの首もとに刺さる寸前で止まった。

レイジングハートからジュエルシードを一つ出した。

「レイジングハート……何を！？」

「きっと主人想いのいいデバイスだよ……」

フェイトは一つ出たジュエルシードを封印した。

「さすが私のご主人♪」

アルフは上機嫌になる。

フェイト達はそのまま立ち去る。

「次会うときは手加減が出来ない。もう二度と現れないで」

「せめて……名前だけでも……」

「私はフェイト。フェイト・テスタロッサ」

「私は高町なのは」

「なのはか……もう二度と現れるな……」

その言葉を残してからフェイト達は立ち去る。

第４話　海鳴温泉（後書き）

ムラサメ
「四話目か……」

フォルテ
「……」

セレナード
「次回はどうしますか？」

ムラサメ
「次回は『想いと絆の力』」

フェイト
「次回も宜しくお願いします」

第5話　想いと絆の力（前書き）

ムラサメ
「……」

フォルテ
「更新が遅いな」

セレナード
「理由は？」

ムラサメ
「続編の過去と未来の英雄達のプロットをしていた」

アルフ
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるよ～」

第5話　想いと絆の力

フォルテ達がジュエルシードを回収してから数日後になる。

「また同じ食事ですね……いい加減に変えなければ成長期の子供にとっては余りにも栄養が偏りすぎている」

セレナードはフェイト達の食事を見てから食べる料理を変えることに気づいていた。

フォルテは黙り続けているのか眼を閉じていた。

「フェイト大丈夫かい？最近全く食べていないから……」

「私は大丈夫だよ。アルフも大丈夫？」

「私は大丈夫だけど……」

フェイトの食事量を見ていたら少ししか食べていなかった。

「私は強いから……」

フェイトは自己暗示していた。

実際フェイトはそこまで強くはない。

心に疲労が増している。

準備をしてから海鳴市のマンションの屋上からフェイト達はジュエ

ルシードを探す。

「フォルテ……ジュエルシードについてですがどうおもいますか？」

「さあな……くだらないことを聞くな」

セレナードのジュエルシードに関することだがフォルテにとって人間が何をしようとも関係がなかった。

フォルテは無愛想ながらもジュエルシードについて考えてはいたがすぐに考えなかった。

「アルフ……この辺りにあるかな？」

「私に任せておきなよ！！誰の使い魔だと思っているんだい？」

アルフは強制的にジュエルシードを発動させた。

ユーノとなのはもジュエルシードの反応に気づいてすぐに結界を張った。

「……」

フォルテとセレナードはアルフとフェイトから離れた位置にいた。

その瞬間に１つの青い光ジュエルシードが現れる。

「手短に済ませろ。いいな……」

フォルテの荒っぽい言葉にフェイトはバルディッシュを構える。

「また……奴らか……しつこいな……」

フォルテとセレナードはいち早くなのはとユーノの存在に気づいた。

なのはとユーノもジュエルシードの位置を確認した。

なのははレイジングハートを構える。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシード、シリアル１９！」

レイジングハートとバルディッシュそれぞれ魔力が収束された。

「「封印！！」」

なのはとフェイトの二つのデバイスから閃光を放ったその光の影響でジュエルシードは光を失う。

なのはとユーノが先にジュエルシードのある場所に行く。

「……急いだほうがいいかもしれませんね」

「……」

セレナードの判断をフォルテは黙ったまま聞いていた。

なのは達が先にジュエルシードにつくも空からアルフが襲撃する。

ユーノは防御壁を張り攻撃を防いだ。

フォルテとセレナードは離れた位置にいる。
なのはとフェイトは対峙していた。
互いに目的がありジュエルシードを回収しているから戦いから避けられないしフォルテが言った言葉を思い出していた。
「人間はただ話し合うためだけに武器を用いるのか？」
確かにあの時はフォルテに屁理屈と言ったが実際フォルテの言ったことは屁理屈とも何ともなかった。
なのははフェイトに自己紹介を終えたがフェイトはバルディッシュを鎌に変形すると同時になのははレイジングハートを構える。
なのはは気づいていた。
フェイトの寂しすぎる眼に。
ただ純粋にフェイトに話したい。
争いもなくただ純粋にどうしてジュエルシードを集めているのかも。
「話さなくていいよ！！フェイト！！」
アルフが叫んだ。

「ただ甘えられてぬくぬくと生きてきた子供にフェイトのことがわかるわけがない！！」

アルフのことを遠く離れた位置でフォルテとセレナードは聞いていたがフォルテとセレナードにとってどうでもよかった。

ジュエルシードが突然暴走をしてからなのはとフェイトのデバイスにヒビが入る。

フェイトはバルディッシュを戻した。

バルディッシュは小さな三角形になり手袋の手の甲に入った。

フェイトはジュエルシードを止めるために走り出す。

「止まれ……止まれ……」

ジュエルシードは次第に光を増してからフェイトの手袋が破れ手から血が流れる。

（こんな時にフォルテとセレナードは何をしているんだい！？）

アルフはフェイトの頑張りでフォルテとセレナードの介入することを信じていた。

フェイト達から離れた位置でフォルテとセレナードは見ていた。

「フォルテ……本当に行かないのですか？」

「オレが人間に手出しするとでも？」

フォルテはいつも通りに無愛想でセレナードの話を受け流した。

「……オレにとって闇は故郷。例え何を混ぜようと黒にしかならない」

フォルテはまるで光を見ずに闇だけを見ているような口調になる。

「どんなに混ぜても黒は黒になりますね。ですがどんな闇でも光という無限の可能性があることを知っています。光があるからこそ闇もある。例えフォルテが認めなくても私はフォルテの光となる」

「無限の可能性の光がある。ロックマンはそれを知っているがオレは知らない。そこが勝敗の分かれ目か……いいだろう。オレはその光を超えて無敵になる」

フォルテは召喚獣ゴスペルを出した。

全体を紫を基調とした狼型ネットナビにしてフォルテ専用のサポートネットナビゴスペル。

「ゴスペル……オレに力を貸せ……バグ融合」

『仰せのままに』

フォルテはゲットアビリティを発動させてからゴスペルのバグを吸

収していた。

「……フォルテＧＳですね……」

セレナードはフォルテの融合形態を知っている。

かつてのセレナードでもフォルテＧＳには勝てなかった。

闇の最強の姿。

漆黒を基調とした姿が現れた。

「……」

フォルテは無言で行くときにセレナードが話しかける。

「フェイトのためですか？」

フォルテのことを知っているが確認の意味で聞いていた。

「……勘違いするな……あんな奴のためではない……オレ自身の意思だ」

フォルテはフロートで移動した。

セレナードもその後を追う。

フェイトの手袋が破れ血が出る。

これ以上無茶すれば手が使えなくなってしまう。

（フォルテ……助けて……）

フェイトはフォルテに助けを求めても人間を信頼していない以上来る確率は皆無に近かった。

ゴゴゴゴゴゴ！！

周りの空間が震え上がる程の強き反応を感じていた。

「な……何だい！？この空間が歪み震え上がる程の異常過ぎる強き反応は！？」

アルフは異常過ぎる程の強き反応に敏感に察知した。

なのはとユーノから絶対に無いしフェイトも空間が震え上がる程の強さは無い。

こんな芸当が出来るのはフォルテしかいない。

「いつまで手間取らせている。魔導師はクズな奴らだ」

フォルテGSになったフォルテがいた。

フォルテはフロートを使い一瞬でフェイトの隣にいた。

「フォルテ……！！」

フェイトが涙目になりながらも再開に喜んでいた。

「下がっていろ……オレがやる……」

フェイトと交代してからフォルテが代わりにジュエルシードを触れる。

「ぐっ！？」

体全体にジュエルシードの電撃がフォルテに襲いかかる。

フォルテの強さに比例したのか電撃の威力は更に増している。

フェイトはフォルテの状況を見てから涙を浮かべる。

「フォルテ！！いくらアンタでも魔導師ではないから無茶だよ！！」

「……黙っていろ。オレが止めてやる……ぐっ……止まれ……」

アルフの叫びを無視してフォルテがジュエルシードを止めている。

「アルフは下がっていて……ここは私の仕事だから……」

「使い魔の仕事は主をサポートすること私も付き合うよ」

アルフはニッコリとサポートすると誓った。

「ならば私だけ何もしないわけにはいきませんね」

今まで姿が見えなかったセレナードが突然現れた。

「「セレナード！！」」

フェイトとアルフは驚いていた。セレナードはごめんなさいと謝った。

「アンタとフォルテは今までどこにいたんだい！？」

アルフの叫びをセレナードは無視した。

「理由は後です。今までは心がバラバラだがここでは一つになっています。絶対にジュエルシードを回収しましょう！！」

「……」

「うん！！」

「もちろん！！」

今までは好き勝手にしていたが今は同じジュエルシードを止める気持ちを持っている。

「「「「止まれ！！ジュエルシード！！」」」」

フェイト達はジュエルシードを触り願った。願いは通じたのかジュエルシードの光は収まった。

フォルテはＧＳの姿を解いてから通常に戻る。

ゴスペルもいたがすぐに引っ込んだ。

力を使い果たしたのか電撃を受け続けていたのかは知らないがフォルテは気を失っていた。

セレナードがフォルテを回収した。

フェイトはジュエルシードを回収した。

セレナード達は目的を達成したのかすぐにその場を立ち去った。

第5話　想いと絆の力（後書き）

ムラサメ
「ぶっちゃげあの爺はこの小説には出番ありませんがＳｔｒｉｋｅｒＳ編をするなら出す予定です」

セレナード
「無印とＡ'Ｓを終わらせてからしてください」

ムラサメ
「わかっています。ブロットも何話があります」

セレナード
「次回は『時の庭園での出会い』です」

フェイト
「次回も宜しくお願いします」

第６話　時の庭園での出会い（前書き）

ムラサメ
「今回は特に大したことはありません」

ラグナロックス
『……魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ』

第6話　時の庭園での出会い

フェイト達はジュエルシードを回収して、戻ってから暫くしたらフォルテが目を覚ました。

周りは不穏な空気に包まれている。

「魔導師だから多少はマシだと考えたが……所詮役にはたたないみたいだな」

フォルテは両手の手のひらが焦げているのを見ていた。

「貴様は、プレシアの命令でジュエルシードを回収するが……いつまでも意味のないことを繰り返すつもりか？」

フォルテの瞳は冷たく冷酷な目で睨み付ける。

「そもそも今回は貴様が勝手に解釈した判断が原因だ」

まるで、互いに協力をしてからジュエルシードを回収したとは思えない会話だった。

「もう、集めるのはやめろ。いつまでも、同じ結末になるなら……なおさらな」

「そ、それは……」

「貴様は弱い……自分の力で解決できない程にな……」

フォルテは容赦ない一言を、フェイトに放つ。
フェイト自身も、体が震えていた。
「貴様の未熟さで、オレ自身も負傷した」
セレナードとアルフとフェイトも怪我をしている。
今回は、フェイトの無謀なため怪我をしたとフォルテは話していた。
ジュエルシードを完全に抑えるのに、負担が大きかったのは、紛れもなくフォルテだ。
「貴様みたいな人間はクズ以下な存在だ」
フォルテは、その一言を残してから、部屋を後にする。
「うう……ひっく……ぐすっ……」
フォルテの一言一言が余りにも重すぎたのかフェイトはアルフの胸で泣いていた。
「フェイト……」
セレナードは誰にも聞こえない声で話していた。
「明日は……プレシア・テスタロッサに私達は時の庭園に行くんだ。ジュエルシードの報告に」
「……」

フェイトとアルフはどこか暗い表情になる。
恐らく時の庭園で何かあったからだと思う。
「そうですか……私も付き添いとして行きます……」
「フォルテも？」
「……」
セレナードは何とも言えなかった。
あのフォルテが人間のいいなりになるとは思えない。
今はどうごまかすのかを考えている。
「どうしても……どうしても……フォルテの力が必要なの……私は弱いから、フォルテにいつか認めてもらうから」
フェイトの瞳は迷いはない。
セレナードはフェイトとアルフに軽く微笑んだ。
「わかりました……フォルテは私が伝えておきます……」
セレナードはその一言を残してから部屋を後にした。

フェイト達から離れたフォルテは夜空を眺めていた。

「……」

ただ黙り続けていた。

あんなことを言っていたからだ。

フェイトは部屋で一人孤独で、泣いているハズだ。

セレナードとアルフはフェイトより確実に、役に立っている。

どうしても気に入らない点が一つだけある。

フェイト・テスタロッサはセレナードとアルフと違って人間だ。

今までのフォルテは人間と共に生活をしたり信頼をしない以上イライラが増すのも無理はない。

「人間……か……不愉快以外何者でもないな」

他者との関わりを持たないのもあるがフォルテにとって人間とはめざわりな存在としか認識していない。

「フォルテ……報告があります……」

「……」

セレナードが背後から来ていた。

「明日……フェイト・テスタロッサはプレシア・テスタロッサにジュエルシードの報告に行くとのことです」

「……」

フォルテはプレシア・テスタロッサの報告に行くことはどうでもよかった。

価値や評価はどうせ大したことはないだろうしむしろ役立たずとのことで躾されることは目に見えている。

「人間の言いなりになれと？それはフェイトからの命令か？」

「どうしてもフォルテの力が必要だとフェイトは言ってましたよ？」

「勘違いするな……あんな人間の命令でオレが付き添うつもりはない……」

セレナードの言葉を容赦なく罵倒するフォルテ。

「ついて来ないんですね」

「ついては来るが……これはオレ自身の意思だ」

フォルテはその一言を残して、フロートを使いその場をする。

深夜のマンション。

何か足音が聞こえていた。

「寝ているよね？」

その足音はフェイトしかいなかった。

「フォルテ……入るよ？」

部屋の扉を開けた。

ギィ……

フェイトは寝ているフォルテ達を見ていた。

「……みんな……ずるいよ……」

アルフはベッドの上で爆睡して、フォルテは壁に寄りかかって寝ていた。

セレナードもフォルテの左側に寄り添って寝ていた。

（右側が空いている……フォルテの優しさかな？）
あんなことを言ったのにフォルテはフェイトが来ることに察していたのか右側をわざと開けていた。
「ありがとう……みんな……協力してくれて……」
自分のためとはいえ協力してくれているフォルテ達に感謝していた。
フェイトはフォルテの右側に寄り添って眠っていた。
夜がふけていった。

「準備出来ましたか？」
フェイト達は準備をしていた。
その時にケーキがある。
もちろん翠屋のケーキではない。
「プレシアにケーキを持って行ったとしても無駄でしょうね」
「だろうな……全く持って理解できんな。人間は……」

フォルテは無愛想にケーキを見てからの感想を述べた。
初めからフォルテとセレナードはプレシア・テスタロッサの説得はする気はない。
フェイトはそのことに関しては、どこか苦痛を覚えていた。
「それじゃあ行くよ……」
フェイトは魔方陣を発動させてから呪文みたいに唱える。
その時に数字やら色々出てきた。
「開け！誘いの主！プレシア・テスタロッサがいる時の庭園！」
フェイト達は転移した。
そして転移が終わり時の庭園についた。
白昼堂々とフェイト達は時の庭園に来た。
「ついてきて」
フェイトは歩き始めるもフォルテは拒んだ。
「ただの報告ならオレ達が出る必要はない。貴様らだけで行け」
フォルテはその言葉を残してからフェイト達を先にいかせた。

報告に行ってから一時間が過ぎていた。

「妙だ」

「フォルテも気がつきましたか？」

セレナードとフォルテはフェイト達の報告にしては余りにも遅すぎることに気づいた。

『主にフォルテ。この庭園に魔力反応が出た。恐らくプレシア・テスタロッサだ』

念話でラグナロックスが話してきた。

『行きましょう。ラグナロックスは道案内を宜しくお願いします』

「……」

フォルテとセレナードはフロートを使い浮きながら神速なスピードで移動開始した。

フォルテとセレナードが来る前にフェイトはプレシアに報告をして

いた。

「母さん……ジュエルシードを持ってきたよ……」

時の庭園の玉座の間にプレシアにジュエルシードを見せたら呆れていた。

「あれだけの日数があったのにたったこれだけかしら？」

「え……？」

その瞬間にプレシアはケーキ屋で買ってきたケーキをメチャクチャにした。

「あ……ああ……」

ケーキがメチャクチャになる姿を呆然としながら見ていた。

想いの詰まったケーキがメチャクチャになる。

「あなたは大魔導師であるプレシア・テスタロッサに恥をかかせた。躾が必要みたいね」

プレシアは鞭を取り出してからフェイトに放つ。

「う！」

フェイトはプレシアの鞭を受け続けていた。

誰もいないプレシアとフェイトのみ時の庭園の王座の間にいたため

余計に鞭の音が響いていた。

バシッ……バシッ……

フェイトのバリアジャケットは傷ついてから肌まで傷ついている。

今の世代で言うなら虐待にしか過ぎない。

場所を変えてからラグナロックスの反応のサーチで王座の間の前にいた。

アルフが泣いていることに気づいた。

「お願いだよ！あの子をフェイトを救ってくれよ！」

突然何て言ったのかはわからないが、フェイトの身に何かが起こったことは確かだ。

『ファルザー……反応は？』

『間違いない……ここにプレシアとフェイトの反応……どういうことだ？生命反応が三つとは……』

『何を企んでいるかは知らんがファルザーは引っ込んでいろ』
フォルテとファルザーの念話は終わる。
フォルテは右腕を変更してから小型版ゴスペルに変えた。
セレナードは気づいた。
「アルフ！！下がってください！！」
セレナードの声でアルフは慌てながらも離れた。
フォルテは右腕の小型版ゴスペルをチャージしていた。
「吹き飛べ！！バニシングワールド！！」
ゴスペルの口から黒い炎巨大な黒炎が放たれた。
その威力は凄まじすぎたのか時の庭園全体を震えさせていた。
壁や扉は跡形もなく破壊されていた。
躾をしている途中に、プレシアは巨大な反応に気づいた。
エネルギーの余波がプレシアに直撃する。
「！！」

プレシアはフェイトに躾をするのをやめてから、とっさの判断で回避していた。

フォルテ達は王座の間に入った。

「あらあら随分野蛮な入り方をする人ね。時の庭園の王座の間の扉や壁を完全に破壊するなんて……」

「……」

フォルテはプレシアの話を無視してから小型版ゴスペルを戻して元の腕になる。

「時の庭園にようこそ私はプレシア・テスタロッサ」

第6話　時の庭園での出会い（後書き）

ムラサメ
「さて次はバトルですね」

セレナード
「頑張ってください。作者さん」

ムラサメ
「フォルテがプレシア・テスタロッサをフルボッコまではいかないな」

フォルテ
「……」

セレナード
「次回は『アリシア・テスタロッサ』です」

フォルテ
「……次回も見てくれ」

第7話　アリシア・テスタロッサ（前書き）

ムラサメ
「フォルテとプレシアの激突！？」

セレナード
「アリシアの存在を知りフォルテはどうするのか！？」

フォルテ
「……魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ」

第7話　アリシア・テスタロッサ

フォルテ達は王座の間に入る。

「貴様か……プレシア・テスタロッサ……」

「あなた達の名前は？」

プレシアはフォルテ達の名前は聞くも遮る。

「「あなた（貴様）ごときに名を名乗る意味はない！！」」

フォルテとセレナードは名を名乗らなかった。

「なぜあなたはここまでしたのですか？」

まずはセレナードは現状理解を求めた。

「躾」

プレシアは何とも思わずに平然と突きつける。

「……だろうな、おおよそジュエルシードの回収の悪さで躾をしたのか……くだらない」

「あら？意外と理解しているのね？そう大魔導師である私に恥をかかせたからよ。まさか私を倒すつもりかしら？」

「……」

フォルテはフェイトを躾をした理由は既にわかっていた。
フォルテは無言でセレナードに合図した。
「フォルテはどうすんだい？」
「決まっている……この人間を破壊する……」
フォルテは闇の力を纏った。
「あら？本気なのね？」
「……さあな。セレナードはフェイトを連れてこの場を去れ」
「わかりました……」
セレナードはフェイトとアルフを連れてから王座の間を去る。
「ハッハッハ！」
「？」
プレシアの笑いに疑問を抱いていた。
「笑えるわね。大魔導師である私にたった一人で挑むとはね。全員なら何とか勝てるかもよ？」
「いちいちうるさい人間だ。かかってこい。貴様みたいな三流相手は破壊してやる」

プレシアの言葉を無視してフォルテは完全にプレシアを馬鹿にしているかのように挑発している。

「なら……実力を見せてもらうわよ！！」

プレシアは杖を使い雷を発生した。

フォルテは雷をフロートで浮きながら神速なスピードで回避する。

右手にエネルギーを集中させていた。

（動きが速すぎる！？全く捕らえきれない！？）

プレシアはフォルテの機動力の高さに驚きを隠せない。

フォルテのスピードは並の人間では捕らえきれない。

「アースブレイカー！！」

フォルテは右腕にエネルギーを集中させてから砲撃を放つ。

プレシアはフォルテの攻撃は当たらなかったもその高すぎる威力に驚いた。

（威力が高すぎる！？一撃でクレーターが出来るなんて！？それに……魔力反応がない！？）

プレシアは浮きながらアースブレイカーの威力を見てから再度驚いた。

実際フォルテのアースブレイカーの威力だけで驚いているがそれを超える技が存在する。

ならばどうするのか？スピードを上げている状況で当てるのは非常に難しい。

的確に狙いしかもフォルテに気づかれないようにするのは非常に難しい。

ならば回避が出来ないほどの状態にしてから雷を発生すればいい。

プレシアはフォルテに雷を放つ。

フォルテは攻撃をしないのかモーションすらしていない。

まるで当ててくれの感覚になる。

フォルテに雷が直撃した。

「馬鹿ね。何もしないなんて……」

プレシアはまるで勝利宣言をしているかのようにフォルテを見る。

煙で見えずにどうなっているのかすらわからない。

「……」

フォルテは無傷でいた。

（馬鹿な！？今のは確実に雷は直撃したはず！？なんで！？）

プレシアは動揺しながらフォルテを見ていたら何か防御バリアで防いでいた。

「ただの遊びか？大魔導師と聞いたがザコだな……貴様は」

フォルテはマントから発生した漆黒のオーラ、ダークネスオーラで防いでいた。

「くっ！？これならどう！？」

プレシアは嵐の如く連続で雷をフォルテの頭上に放つ。

フォルテはダークネスオーラで全て防いだ。

オーラにヒビ一つそれどころか更に強度を増している。

「やめておけ……貴様ごときではオレは倒せん……」

フォルテはダークネスオーラを解いてフロートで移動する。

フォルテは先程のファルザーの確認を思い出した。

（生命反応が三つだったな……どこにあるんだ？意外と隠し扉にあるかもな……）

フォルテは適当に探していた。

壁に寄りかかると部屋が反転した。

「っ！？」

プレシアはまるで取り乱したかのようにその場所へ急いだ。

「これは……」

フォルテが見たのは研究ポットで静かに眠っているフェイトに似た少女だ。

「そうか……そういうことか……フェイトはやはり……」

フォルテは研究ポットを見ているとプレシアの雷の気配に気づいた。

フォルテはその場からフロートを使い離れた。

「見てしまったのね……私のアリシアを……」

（アリシア？）

フォルテは薄々わかっていた。

アリシアの存在を知らない。

「アリシア・テスタロッサ。事故死した私の娘。そしてアリシア・テスタロッサの記憶をフェイトに授けた」

（授けたか……人間は傲慢だな……）

「フェイト・テスタロッサはアリシア・テスタロッサの元に作られた存在。プロジェクトFと呼ばれた！！」

プレシアはフェイト・テスタロッサの存在を話していた。

「プレシア。貴様に聞くべきことがある」

「何かしら？」

「フェイト・テスタロッサは家族ではないのか？」

「フェイトが家族？冗談じゃないわよ！！」

「なんだと！？」

フォルテはプレシアの発言に目を細めた。

「あんな出来損ないが家族？アリシアの記憶を渡してもアリシアのように笑顔で接してくれなかった。記憶を渡しても無駄だったみたいね」

プレシアはフェイトを家族ではないことを否定するとき聞き飽きたのか次に話す。

「次はアリシア・テスタロッサだ。事故死したが蘇らせる術はあるのか？」

「あるわよ。アルハザードと呼ばれた地。失われた技術で幸せだったあの頃に戻るためよ！！」

プレシアは目をカッとさせてから目的を話した。

「くだらん……人間は死者蘇生をありもしない場所に頼りながら求めているのか……」

「わかってないわね……」

プレシアはフォルテのことを呆れながら見る。

「わかってないのは貴様だ……貴様はオレの知る科学者のゴミと何ら変わらん。より高度な物や質のあるものを作り上げ……科学者の都合に合わなかったり危険だと判断したらすぐに処分されて新しい物を作り上げる……何のために作り上げては捨てられるそいつらの気持ちも知らずにな……」

フォルテは今までの経歴からプレシアをフォルテのいた世界の科学者と同等な思想だと判断した。

フォルテを作り上げた科学者。

だが危険すぎるや余りにも他者よりも優秀過ぎたが故に人間はフォルテを抹殺の対象となる。

ある科学者は信頼したが裏切られた。

その時からフォルテは人間や他者との関わりを完全に絶ち一人孤独に生きる。

「ゴホ！ゴホ！」

プレシアは突然血を吐いた。

「病？」

「ええ……大魔導師であるこの私でも病には勝てないわね……」

プレシアが焦る理由は病で自分の寿命が後少ししかないからだ。

ネットナビは不老不死で人間みたいに食生活をしなくても生きていける。

もし仮にジュエルシードを集めたとしてもプレシアはアリシアよりも先に死ぬという現実は変わらない。

「貴様はどんな形であれフェイトを作り上げたことにはかわりない」

「！？」

フォルテはプレシアがフェイトを作り上げたことに驚愕の表情になる。

「今の貴様はアリシアしかみていない。アリシアが果たしてそれを望むのか？望まないだろうな……決して」

フォルテはまるでプレシアを哀れみな目で見ていた。

「違う！私はアリシアさえいればいい！後は何もいらない！」

「うるさい人間だ。アリシアとフェイトは貴様の元から離れて一人孤独になるだろうな」

フォルテはプレシアに背を向けてからマントを翻す。

「どんな形だろうとアリシアとフェイトは姉妹だ。最後の最後でオレらしくなく柄にもないことを言ってしまったな」

フォルテは浮きながらフロートを開始する。

「私は間違っていたのかしら？」

プレシアの声が聞こえたのかフォルテは立ち止まる。

「……」

フォルテは何も言わずにその場を一瞬で去る。

フォルテはフェイト達がいる部屋をファルザーが捜索しながら探す。

「フォルテ！大丈夫ですか？」

部屋に入りセレナードがフォルテに駆け寄る。

「問題ない……それより……」

フォルテはフェイトに目を配る。

フェイトは暫くしたら目を覚ました。

「フォルテ……母さんが……母さんが……」

フェイトは泣きながらプレシアのことを伝えた。

「今の貴様にプレシアのことを伝えても無駄だ」

フォルテは冷たく見放す。

「貴様がオリジナルになればいい」

「え？」

フォルテの言ったことにフェイトはキョトンとする。

フェイトはアリシアの存在を知らない。

今はアリシアのことを話してしまえばズタボロの精神が更にショックを受けてから最悪死ぬことも有り得る。

「……何でもない」

フォルテはフェイトのことは話さなかった。

プレシアが自ら話してくれる。

その時までフェイトとは離れた距離感だが側にいるべきだとフォルテは判断する。

「……悪かったな……救うことが……出来なくて……」

フォルテがフェイトに謝罪をする。フェイトはキョトンとする。

あのフォルテが誰よりも人間を恨み憎んでいるフォルテが謝っている。

セレナードは意外そうに唖然としていたがすぐに微笑んだ。

フェイトもすぐに微笑んだ。

「私はフォルテがどんな形であれ必ず助けてくれると信じていた」

「そうですね。誰もがフォルテを認めなくても私達がフォルテの味方ですから」

どんなに不器用な謝罪でもフォルテの謝罪は確実にフェイト達に伝わる。

「そうか……」

フォルテはマントを翻す。

人間は未だに憎んでいて更に信頼もしていない。

フェイトとセレナードは自然と憎しみが消えた。

正確に言えば憎めなくなっていた。

闇に沈んだ一人孤高の戦士に僅かながらの光が差し込まれていた。

第7話　アリシア・テスタロッサ（後書き）

ムラサメ
「フォルテ……吐きまくったな……科学者を嫌う理由を」

フォルテ
「オレは思ったことを言っただけだ」

セレナード
「作者さん……次回はどうするのですか？」

ムラサメ
「フォルテ無双は時空管理局交渉編でもする予定だ」

フォルテ
「……」

セレナード
「次回はタイトルは未定ですが宜しくお願いします」

第8話　光の救世主と闇の破壊神による連撃（前書き）

ムラサメ
「今更だがギャグが書けない」

セレナード
「作品やら原作やらゲームがシリアス×シリアスのクロスオーバーだから無理もないですよ？」

フォルテ
「……」

なのは
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第8話　光の救世主と闇の破壊神による連撃

～フェイトｓｉｄｅ～

フェイト達はプレシアの報告を終えてから、今日もジュエルシードを空から浮いて探していた。

「フォルテ……フェイト達の話によりますとどうやらこの世界には時空管理局という組織があるみたいです」

「時空管理局？」

「時空管理局は警察と軍隊や自衛隊を総合している組織で事件や遺失物を保護する組織です」

セレナードが時空管理局についてある程度説明した。

「オレ達がいた世界のネットポリスと同じ組織みたいだな」

「そうなりますね……フォルテなら気づいていると思うのですが……」

セレナードが言いかけた時にフォルテもどこかしら気づいていた。

「ああ……未だに時空管理局という組織が現れないことか……何を考えているかは知らんが、奴らはプレシア・テスタロッサやフェイト・テスタロッサにこのジュエルシードの存在にも気づいているはずだ……なのに未だに姿をみせない……何を考えている……」

フォルテはなぜ時空管理局が姿を見せないことを考える。

確かに、今まで姿を見せないことに疑問に持っていることには間違いではない。

「……奴らは、フェイト・テスタロッサを見殺しやオレとセレナードの身体データや技術を悪用する可能性が高いな……」

フォルテの人間ではない身体やセレナードの能力も時空管理局が利用しないわけがない。

そして、フェイト達はジュエルシードのある場所をラグナロックスが念話でセレナードに伝える。

『主……公園にジュエルシードの反応を見つけた……』

『ご苦労様です。ラグナロックス』

セレナードはラグナロックスに礼を言ってからジュエルシードがある海鳴公園に目指した。

海鳴公園についたらジュエルシードが勝手に発動した。

突然、木にジュエルシードが移り、それは木の化け物になる。

「ジュエルシード……それに……」

フェイトはジュエルシードを見てから木の化け物に気づいた。

「あの白い魔導師もいる……」

フェイトと前にぶつかった白い魔導師高町なのはを見た。

「貴様はジュエルシードだけに専念しろ……奴はオレが仕留める」

「フォルテだけではなく私もいますよ？フェイトはジュエルシードを回収することだけを考えてください」

フォルテとセレナードの判断にフェイトは困惑する。

「今回は強い奴ならオレ達が出たほうがいい」

フォルテとセレナードは木の化け物となった敵と対峙する。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～なのはｓｉｄｅ～

なのはとフェレット化したユーノがフォルテとセレナードの行動を見ていた時に無謀だと判断した。

「彼らだけではあの化け物と渡り合うのは無理だ！？」

「大丈夫だよ……ユーノくん……」

「なのは！？」

ユーノが介入するときになのはが遮る。

「あの二人は私よりもいやこの中では遥かに強いから……」

なのはの言葉にユーノは気づいた。

なのはが震えていた。

あの時にジュエルシードでレイジングハートが壊れてユーノが修復してから今戦いの場にいる。

だが、異常過ぎるフォルテの強さに震えて何も出来なかった。

なのはは今回はジュエルシードに専念することにした。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～フォルテ・セレナードｓｉｄｅ～

フォルテとセレナードは木の化け物に対峙する。

「ゴオオオオ！！」

木の化け物は耐えきれなかったのか二人から放たれた威圧感を感じていた。

「うるさい奴だ」

「そうですね」

フォルテはダークアームブレードを出してからセレナードはアルカディアスブレードを出した。

木の化け物が根を使いフォルテとセレナードを襲撃する。

ズバ！！

フォルテとセレナードの速さと正確さで木の根を捌いた。

右と左そして下から木の根が多彩な方向からフォルテとセレナード目掛けて襲う。

セレナードがバリアをフォルテの範囲まで張り木の根を防いだ。

フォルテはダークアームブレードを使い下から発生した木の根を捌いた。

「何の真似だ。助ける筋合いはない」

フォルテとセレナードは互いに背中を合わせてからフォルテはセレナードのした行動で睨んだ。

「勘違いしていますが私はフォルテのためにしているだけ」
「なら、尚更不愉快だ」
フォルテとセレナードは木の化け物の根をを睨み一気に斬る。
「「邪魔をするな！！」」
フォルテとセレナードは普段ならばそこまでした仲の悪さではない。
たが、戦いとなれば話は別。
戦いになればフォルテが全て敵を蹴散らす。
他者に介入させることを許さないフォルテはダークアームブレードで木の化け物本体を斬るもバリアで防いだ。
「バリアか……ザコの割には少しはやるみたいだな」
フォルテはダークアームブレードを戻してから普通の腕になる。
セレナードもアルカディアスブレードを戻してから普通の腕になる。
「かつて、オレは孤独だったが今のオレは違う」
フォルテは腕をバスターに変えてから残りの木の根を全て破壊した。
「決して負けることがない強さ……負けない信念それが想い」

フォルテは右腕にエネルギーを溜めた。
セレナードもフォルテの強さに感知したのかエネルギーを溜めた。
「「消え去れ！！」」
フォルテとセレナードの同時砲撃を放つ。
「「アース（ホーリー）ブレイカー！！」」
かつて、フォルテは誰にも頼らず一人で敵を倒し絆や想いの力を知らないフォルテだった。
しかし、今は違う。
誰かの力になる。フォルテにとってくだらなく幻想な言葉に過ぎないがその力が時には潜在能力の強さを二倍にも三倍にも引き上げる。
だが、フォルテは完全に想いや絆を理解し、信頼したわけではなかった。
ほんの少し理解した。
木の化け物の張っていたバリアが完全に破壊した。
その刹那、フォルテの右腕には闇の力が纏う。
迫りくる、最強を超えた無敵の闇の破壊神。
「消え去れ、存在！！」

フォルテの闇の砲撃を木の化け物に放つ。木の化け物が完全に消えてからジュエルシードが出る。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～フェイト・なのはｓｉｄｅ～

なのはとフェイトはジュエルシードが出てきたことに気づいた。

「リリカルマジカル！！」

なのははレイジングハートを構える。

「ジュエルシード！シリアルナンバー７！」

フェイトはバルディッシュを構える。

なのはとフェイトは互いにデバイスを構えてから魔力を注ぐ。

「「封印！！」」

同時にジュエルシードを封印してからジュエルシードの光がおさまる。

「……ジュエルシードには衝撃を与えてはいけない……また私のレイジングハートとフェイトちゃんのデバイスが壊れちゃう……」
あの時みたいにジュエルシードが暴走してから危険な状況になる可能性が高い。
「……だけど、譲れない！」
フェイトはバルディッシュを構える。
「……お話がしたいだけなのに……」
なのはもレイジングハートを構える。

「……戦う気ですね」
「みたいだな……」
フォルテとセレナードは木の化け物を倒してから地上に降りていて、なのはとフェイトの戦いを開始するのを見ていた。
その時、セレナードが戦いを中断させるために動いた。
「止めるな」
「フォルテ？」
「……これはあの二人の互いの信念をかけた戦い……手出しは無用

だ」

セレナードはフォルテの怒りに気づいた。

それと同時に、アルフとユーノはなのはとフェイトの戦いを危険だと判断して戦いを止めるもフォルテが遮る。

「……今、この場であの二人の戦いを止めるな。場の空気を読まないバカはオレが再起不能まで叩き潰す。あの二人の戦うというプライドを傷つける奴、全てだ」

フォルテの静かすぎる怒りにアルフとユーノは動けない。

もし、なのはとフェイトの戦いを止める奴はフォルテが全て潰す。

例え、どんな奴が相手だろうと関係ない。

しかし、そんな戦いを中断させたバカな奴がいた。

「ストップだ！」

突然乱入をする人物がいた。

「ここでの戦闘は危険過ぎる！」

黒の魔導師の少年はなのはとフェイトの戦いを中断させた。

なのはとフェイトは一旦戦うのを止めた。

突然過ぎる状況に理解できなかった。

まだなのはとフェイトの反応がまだましというより、当然の反応だ。ある一部を除いて。

「貴様……」

フォルテは乱入した少年を睨む。普段の紅い瞳で怖かったが、それを超えていた。

そこには、殺気も混ざっている。

アルフとユーノは乱入した少年に驚いている以前にフォルテの怒りに震えていた。

「私は、もう知りません。それより、初めてですね。怒りと憎しみと不愉快を覚えたのは」

光の力を操るセレナードでも怒りと憎しみに満ちていた。

それだけ許されないことを乱入した少年はしたことに気づいていない。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウン。詳しい事情を聞こうか」

第8話　光の救世主と闇の破壊神による連撃（後書き）

ムラサメ
「うわーＫＹだ」

クロノ
「誰がＫＹだ！！」

セレナード
「それとも、バカ・ハラオウンですか？」

バカ
「バカではない。それに名前を変えるな！！」

フォルテ
「……クズが」

クズ
「クズでもない！！クロノ・ハラオウンだ！！」

ムラサメ
「はいはい、わかったよ。ハゲノ・ハラオウン」

ハゲノ
「ハゲノ・ハラオウンではない！！クロノ・ハラオウンだ！！」

ムラサメ
「クロノ、弄りおもしろｗｗｗ」

クロノ
「お前達、そんなにボクを弄るのが面白いのか！？」

フォルテ
「……さっきから、うるさい。ＫＹ・ハラオウン」

ＫＹ
「ＫＹではない！！お前達みたいなざ「殺るか？」え！？」

完全にフォルテはキレていた。

フォルテ
「さっきから、いちいちうるさい餓鬼が。消え失せろ！！ダークネスオーバーロード！！」

クロノ
「ギャアアアアア！！！！！！！」

クロノはダークネスオーバーロードをモロにくらい消え去った。

ムラサメ
「これで悪は滅びた」

セレナード
「ですね、作者さん。次回は？」

ムラサメ
「次回はＫＹを潰す。あのムッツリスケベな奴は嫌いだからな」

セレナード
「（作者さんは、とことん嫌いですね……ＫＹ・ハラオウン）」

ムラサメ
「次回は『戦いの場を読まないＫＹは潰せ』です。ＫＹには、地獄を見せないと」

セレナード
「次回も宜しくお願いします」

第9話　戦いの場の空気を読まないＫＹ（前書き）

ムラサメ
「後半はセレナードが若干黒い……」

セレナード
「気にしたら、負けですよ？」

フォルテ
「……そうか」

フェイト
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第9話　戦いの場の空気を読まないＫＹ

～クロノｓｉｄｅ～

突然、クロノ・ハラオウンというＫＹが乱入していた。

「まずは武器を引くんだ」

クロノ・ハラオウンはなのはとフェイトに武器を引かせた。

「本当に、空気が読めない人ですね。尺に触りますが、今回は許せませんね」

クロノが武器を引かせることを望んだときには、セレナードは聞いていてどこか、許せなかった。

「フォルテ……どうしますか？」

セレナードは再び、フォルテに視線を送る。

その時には、フォルテは更に不機嫌になる。

「……気に入らんな、あんな奴……」

フォルテはクロノのことが嫌いみたいだ。

「このまま、戦闘を続けるなら……」

クロノはデバイスＳ２Ｃを構えてから魔力を放つもオレンジ色の魔

力がクロノを狙う。

「フェイト！セレナード！フォルテ！ここは一旦引くよ！」

アルフはクロノにオレンジ色の魔力を放つ。

クロノはそれを防いでいた。

なのはとユーノもアルフのオレンジ色の魔力を避けていた。

その隙に、逃げるのが狙いみたいだ。

フェイトは誰にも見えない内に、ジュエルシードに近づいてから手を伸ばした時に、青い魔力弾が直撃する。

「フェイト！」

アルフは叫んだ。

土煙で何も見えなかったが、土煙が晴れた時には、フェイトは無傷だった。

「フェイト……大丈夫ですか？」

セレナードが、フェイトを抱えてから攻撃を避けた。

「セレナード……私は大丈夫だよ」

クロノはセレナードの行動を睨んだ。

「貴様！！その魔導師は犯罪者だぞ！！庇うのか！！」

クロノの言葉を無視してから、セレナードはフェイトを地上に降ろした。

「庇うも、何も、ただジュエルシードが強引に発動するのを防いだ。問題あるのか？」

セレナードは丁寧語では話さない。どうやら、頭に来ているようだ。

「貴様、ふざけているのか！？」

クロノは我慢できなかったのかは知らないが、クロノはデバイスＳ２Ｃを使いスティンガースナイプを放つ。

「フェイト！セレナード！」

アルフは叫んだ。ここにいる、誰もがスティンガースナイプを直撃したと思っていた。

土煙が晴れると、フェイトとセレナードはスティンガースナイプを一撃も喰らっていない。

スティンガースナイプを全て、誰かが相殺させた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～フォルテｓｉｄｅ～

その時、スティンガースナイプが見えたのか、フォルテは浮きながらバスターを放ち、スティンガースナイプを全て相殺させた。

「貴様も、邪魔をするのか！？」

クロノは忌々しい表情で、スティンガースナイプを、フォルテ目掛けて放つ。

フォルテは動くまでもないと、判断したのか、バスターを元の右腕に戻した。

スティンガースナイプがフォルテに直撃した。

「……貴様の技など、わざわざ動いてから、避ける必要もない」

フォルテはマントから発生した漆黒のオーラ、ダークネスオーラを展開して、スティンガースナイプを全て防いだ。

「な！？防御魔法！？」

クロノは信じられない表情で、フォルテを見据える。そんなクロノをフォルテは無視してからアルフとフェイトに目を配る。

「貴様らは先に帰れ。オレとセレナードが残る」

「そんな！私はフォルテとセレナードを見捨てて帰ることは出来ない！」

「そうだよ！フォルテとセレナードは黒の魔導師に捕まるじゃないか！」

フォルテとセレナードが囮になり、フェイト達を逃がす作戦に、フェイトとアルフは納得していない。

「捕まる？そこの、雑魚もどきがオレとセレナードを拘束できるとでも思っているのか？」

フォルテは嘲笑い、あんな雑魚相手に、フォルテとセレナードが捕まるわけがないと確信していたのか、フォルテはクロノを馬鹿にした態度で、見下ろしていた。

「キミ達全員を捕まえて見せる！」

クロノの決断でフォルテの表情が歪んだ。

「……面白い。なら、それ相応の実力を見せてみろ……弱者」

「っ！！ボクは弱者ではない！！クロノ・ハラオウンだ！！」

クロノは顔を真っ赤にしている。

「知るか……これから潰す相手を、いちいち覚える意味はない」

フォルテはダークネスオーラを解除して、フロートで移動する。

「は、速すぎる！？」

クロノは驚愕と絶望の表情になるも、フォルテはそんなことは一切気にしていない。

フォルテは一瞬でクロノの懐に入り、クロノの胸ぐらを掴む。

「……貴様、オレが目の前にいるというにも関わらず戦いを中断させるとは、随分バカな真似をしてくれた……」

「っ！！キミは、あの二人を戦わせていたのか！？」

フォルテの言葉に言い返すクロノ。

「戦いを求め、戦いたい連中に戦わせて何が悪い？あの時、ジュエルシードが暴走したとしてもオレ達がジュエルシードを止めることも、可能だったはず」

フォルテの言う理由も、充分理解できる。

あの時、仮にジュエルシードが暴走したとしてもフォルテ達が止めればよかった。

それを、クロノは。

「それを貴様はくだらない理由で止めた」

フォルテにとって戦いとは生き甲斐みたいな物だ。それを止めたクロノは不必要以外、何者でもない。

「ここでは戦うのは危険だと貴様が言ったが、そんなものは戦場では関係ない」

あの時、なのはとフェイトの１ＶＳ１のマジバトルの展開だった。
それを知らない、クロノは戦いを止めた。
クロノの空気の読めなさは世界中の誰もが見てもＫＹで、フォルテと同じ気持ちで不快感を抱くことになる。
「どんなに弱い奴が相手だろうと、そこに危険な場所があり戦う事が出来ない状況だろうと関係ない。戦う意志や戦いを望む奴が一人でもいれば、そこはオレ達の戦場だ」
長年に渡り、あまたもの敵を倒し続けてきたフォルテだからこそ言える台詞だ。
なのはとユーノ、フェイトとアルフはフォルテの話を聞いてから、うんうんと頷いた。

セレナードも感心していた。
「キミはジュエルシードが暴走したら、どれだけ危険な状況になるかを知らないからそんなことが言えるんだ！」
明らかに、失言しか言っていない。
フォルテはその時、何を考えていたのかは知らないが、クロノを投げ捨てる。

クロノは尻から落ちた。それと同時に後退りをする。

「……つまり、貴様はこの戦いの場にジュエルシードがあるから戦いたくはない……はっきり言って可笑しな話だな、それは」

フォルテはクロノを見下している。

その瞳は余りにも、恐ろしく、誰もがフォルテの視線から、反らすことが出来ない。

正に、蛇に睨まれた蛙の状況である。

「フェイト……ジュエルシードを回収しろ……」

フォルテの冷静すぎる判断で、フェイトはジュエルシードを回収する。

フェイトとアルフはジュエルシードを回収して、その場を立ち去る。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～なのはｓｉｄｅ～

「さすがに、これは見てはいけないね」

「そうだね」

なのはとユーノはここから先は見てはいけないと判断して、公園の影に隠れた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～セレナードｓｉｄｅ～

フォルテのＫＹ縛りを見てから、誰もいないかを確認していた。

セレナードからどす黒いオーラが出ていた。

『あ、主から黒いオーラが出ているのは気のせいか？』

『気にしたら、負けですよ？ラグナロックス。手出しはしないでください……したら、潰しますから』

『あ、ああ……（ヤバい、無茶苦茶怖い。我でも震える程だ）』

ラグナロックスは冷や汗を流していた。

それだけ、セレナードが怖いからだろう。

セレナードはフォルテのいる場所へと急いだ。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～フォルテ・セレナードｓｉｄｅ～

セレナードはフォルテのいる場所へと急いだ。

「キミ達、これは何の真似だ！！」

クロノはデバイスＳ２Ｃを構えるが。

「まずは、武器を奪わせていただきます」

セレナードはクロノのデバイスを盗み、無防備の状態のクロノに近づいた。

「残念ですが、今回は私とフォルテは同じ考えなので」

「……」

セレナードとフォルテは戦闘体制に入る。

「言ったはずだ。戦う意志や戦いを望む奴が一人でもいたらそこはオレ達の戦場だと」

「暴走するジュエルシードも、盗まれましたよ？少女が」

ここに、暴走するジュエルシードがない。

戦闘には、問題はない。クロノはフォルテとセレナードの考えに気づいた。

「まさか……まさか……キミ達の狙いは……」

クロノは絶望と恐怖に染まる。

「さて、始めましょうか？」

セレナードはアルカディアスブレードを構える。

「貴様が望む、ジュエルシード抜きの戦いを……」

フォルテは腕に闇の力を纏う。

「ぐ……！？」

クロノは負ける以前に、フォルテとセレナードに殺されることを考えていた時に通信が開く。

通信のモニターの中には人が映っていた。緑色の髪をしていた女性だった。

『そこまでにしてください。私達が悪かったので許してください』

「……人間はとことん、邪魔をするのが好きみたいだな」

フォルテは攻撃を中断し、不機嫌になりながらも、モニターを見る。
『私はリンディ・ハラオウンです。あの子の母です。こちらが本当に悪かったです。お願いします。許してください』
「……いいでしょう。攻撃はやめますが、条件があります」
セレナードは条件が発動した。
「私達にあなたがいる場所へと転移させてください」
「貴様……誰に「殺すぞ？」ひ！？」
セレナードの殺気にクロノは震える。
「後は、私達の戦闘データや身体の作り等々のデータを全て消してください」
『ですが……』
「消してください。戦いの場の空気を読まなかった奴を潰しますよ？再起不能までに……」
セレナードに優しさはもはやなかった。殺気を放っていた。
『わかりました。戦闘データ等々はこちらが全て消します』
リンディはモニターから、見ていたが、セレナードの殺気に震える。
「最後です。私達が時空管理局に来るとき、監視カメラの映像を全

て切ってください」

『さすがに……そこまでは……』

リンディはいくらなんでも、セレナードの要求でも、そこだけは譲れなかった。

「しますよね？」

セレナードは素晴らしい笑顔になる。男がそれを見たら惚れてしまいそうだが、逆にそれが恐ろしかった。

「怖い……怖すぎるよ。ユーノくん」

「なのは……ボクも充分に怖い」

なのはとユーノはセレナードの笑顔に恐怖を覚える。

『わかりました。時空管理局の監視カメラの映像を全て切ります』

リンディはセレナードの素晴らしい笑顔に恐怖を覚えたのか、すぐに条件を飲んだ。

「いいですよ」

「貴様は好き勝手に「黙れ人間」っ！？」

クロノはセレナードを睨むも、フォルテの殺気に震えていた。

「艦長、すみません。逃がしてしまいました」

『いいのよ……過ぎてしまったものは仕方ないわ』

クロノは謝るも、リンディは気にしなくていいと言った。

『それから、彼らについてきてもらおうかしら？いろいろ聞きたいことが、あるから』

「わかりました」

「ついて行きますか？それと、隠れている人は出てきてください」

セレナードの言葉でなのはとユーノが出てくる。

「あははは……」

なのはは苦笑していた。

フォルテはどさくさに紛れて、逃走するも、見つかってしまい、不機嫌になりながらも、渋々ついてくるみたいだ。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

第9話　戦いの場の空気を読まないＫＹ（後書き）

ムラサメ
「ＫＹ潰しは、出来なかったが、それなりの恐怖感と絶望感を与えた」

フォルテ
「あんな弱者はどうでもいいがな……」

セレナード
「そうですね、作者さん？次回は？」

ムラサメ
「次回はタイトルは未定だが、交渉を断ることくらいだ。無双開始だから……」

セレナード
「次回も宜しくお願いします」

第１０話　交渉潰し（前書き）

ムラサメ
「かなりかかりました。読者の皆様、すみません」

セレナード
「暇な時間はポケモンやらロックマンのゲームをしていた。大学のレポートがありましたね」

フォルテ
「後者はともかく、前者は作者の暇潰しだろ？」

ムラサメ
「すみませんでした」

セレナード
「では、魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第１０話　交渉潰し

なのはとユーノ、フォルテとセレナードはクロノの案内で、時空管理局の船『アースラ』についた。
なのはは、暫く驚いてから、クロノは呆れていた。

「その……だな、早く艦長に会わせたいが」

「子供ですね、ＫＹ」

「ＫＹと言うな！！まだ１４歳だ！！」

「私からすれば、まだまだ子供に見えますね。余り、イライラしない方がいいですよ？髪の毛がはげますよ？」

セレナードは面白半分にクロノを弄る。
ユーノの人間になることは暫く、なのはは収まらなかった。
そんなこんなで、リンディの部屋についた。
なのはとユーノは入る。
セレナードは少し興味があるのかは知らないが、周りを見ていた。
フォルテは興味がない以前に、人間が作ったものには全く興味がない。

「いらっしゃい……どうぞ座ってください」

リンディに進められてから、なのは達は座る。
フォルテに礼儀という二文字は知らないのか、あぐらをして座る。

「用件があるなら、さっさと言え……。オレは貴様らの下らない世間話を聞きにきたわけではない……」

フォルテは目を閉じてから、口元をマントで隠してキツい一言を放つ。

そして説明が始まる。

説明をしてから数十分が過ぎた。

「それで、あのロストロギア……ジュエルシードはあなたが回収しようとしていたのね……」

「はい……」

「立派なことだわ」

「だが同時に無謀でもある」

リンディはユーノのジュエルシードを回収することに賞賛していたが、クロノはユーノの行動に呆れていた。

「ロストロギアとはなんですか？」

なのははロストロギアのことを知らなかった。

ロストロギアは失われた遺産。

そのロストロギアの影響で世界が滅びる可能性がある。

例えば、フォルテのいた世界など平行世界が幾つもの存在する。

それらの失われた骨董品を時空管理局はロストロギアと呼んでいた。

なのははロストロギアはとんでもない代物だと知ったが、フォルテとセレナードにとってはそんな事情は下らないことにしか過ぎなか

った。
リンディはお茶を飲み尽くしてからフォルテ達に言った。
「あなた達の体に関することで聞きたいことがあるのですが……」
「……」
「あなた達は次元漂流者ですね。……あなた達の世界では当たり前なんですか？」
「当たり前？」
「あなた達は人間ではありませんね。それも特殊な作り方をしていることがわかりました」
「……調べたみたいだな。勝手に」
底冷えするような声で眼を開いてから、呟いた。
「勝手ですが、調べさせていただきました。データは全て抹消しています」
リンディの説明でなのはとユーノは驚いた。
それもそのはず、フォルテとセレナードはネットナビと呼ばれた電脳体だからだ。
「あなた達の体についてもう少し調べ――――」
「断らせてもらう……。
人体実験など受ける意味がない上、初めから貴様らにその権限があ

るとでも思ったか？」
フォルテがバッサリと断ることにリンディは諦めていたが、クロノは食らいついた。
「お前達の身のためーーー」
「潰してやろうか？」
クロノは言いかけた時にはフォルテは軽く殺気を放つ。
クロノはフォルテの殺気に後退りをする。
「……今回は貴様らが勝手に解釈をした程度……。
貴様の考えは貴様自身を傷つけ、更には武器を奪ったという罪をオレ達に押し付ける。貴様が有利な立場にするための口車に過ぎない……」
「だが……手を出したのは貴様らも同じだろ！？」
「オレを貴様みたいな場の空気すら読めない奴と一緒にするな。オレ達は始めからあの二人の戦いに手を出したつもりなどなかった……。
あのまま、戦わせていれば良かったものを貴様が勝手に止め、先に手を出した貴様を迎撃させるための正当防衛を働かせたにすぎない」
あくまでも、事実を述べている。
フォルテとセレナードは始めから、なのはとフェイトの戦いに手を出さずに見ている予定だった。
クロノは戦いを止めた上に、民間人であるフェイトに先に手を出した。

だから、フォルテとセレナードはクロノに正当防衛を働かせる意味で攻撃した。
俗に言う、『やったらやり返す』という感じだ。
「……これ以上反論しても無駄よ。先に戦いに手を出したのは私達だから彼らに反論はできないわ……」
リンディはフォルテとセレナードの体の解析をするのを諦めた。
「……わかりました」
クロノはフォルテを睨むも、フォルテはそんなクロノなど眼中になかった。
「ジュエルシードは時空管理局の権限により、回収します！」
「「そんな……」」
リンディの発言になのはとユーノは驚くが、フォルテとセレナードは表情を崩さない。
「今回の事件の内容を忘れてから、元の世界に帰るがいい」
「でも……」
「次元干渉の問題だ。民間人に介入できる話ではない」
なのはの諦めない表情にクロノが遮る。
「いきなり、次元干渉とか難しくて理解が出来ていないようだから、家に帰ってもう一度気持ちの整理をしてから、再び話し合いましょ

う」

リンディは気持ちの整理をさせるためになのはを宥める。

「ゴミクズ以下な組織だ。余りにも、腐れている」

「なんだと！」

クロノはフォルテを睨んでいる。
フォルテは逆に睨み返していた。

「胡散臭すぎて、ヘドが出る。貴様らは今の今まで、介入しなかったのは、解析をしていたため介入しなかった。そんな連中に協力するのか？普通なら、しないだろうな」

フォルテの発言は時空管理局を罵倒している。
全員がフォルテに注目する。

「クロノ、貴様は言ったな……次元干渉の問題だ民間人に介入させないと……」

「あ、ああ」

「なら、なぜ再び集める？この場にいる人間も少ない。今回の事件でなのは達と知り合いになれば貴様らが、出なくてもなのは達が解決するのが狙いみたいだな……」

少し怒りに満ちた声で、時空管理局に勧誘する目的を話していた。

「更に、他人の情報を解析するなど、プライバシーの侵害まで犯し

ている。一度、忠告程度はしてやる」

フォルテは右腕を長剣に変えてから、威嚇する。

「腐れた真似はするな。……次、下手な真似をすれば貴様ら全員、口封じで存在ごと消してやる……」

フォルテはリンディの首元に剣を当ててから、殺気を交えた。

クロノとなのは達はめちゃくちゃ震えている。

「（フォルテの怒りはいつ以来、でしょうか？）」

セレナードはフォルテの怒りに冷や汗を流していた。

「オレを利用して、使い捨てになるまで利用した後、捏造やら、事実を隠蔽するためだろ？他の人間達には時空管理局は“正義”や“安全で平和を維持する綺麗事な組織”だとほざくためにな」

「それが、管理局のやり「貴様の言い訳を聞くつもりはない」っ！」

「今回は貴様らの巻いた種だ。貴様らで、解決しろ。無理矢理、管理局に入らせるような真似をするのではなく、協力程度なら考えてもいい。最も、そこの餓鬼の魔力やオレの作りなど、貴様らからすれば喉から手が出る程だからな」

「私の魔力が！？」

なのははフォルテの発言に驚いていた。

フォルテやセレナードの　技術は管理局からすれば喉から手が出る

程の代物だ。
それを管理局は利用しないわけがない。
「時空管理局は数多の管理をするなら、餓鬼一人の魔力を測定することは簡単だ」
フォルテの時空管理局に対する、汚点をリンディは黙って聞いていた。
「はっきり、言ってやる。貴様ら人間の言うことなど、オレが信じるとでも思ったか？」
フォルテは剣を戻した。
リンディ達は、反論したくとも、反論できなかった。
フォルテの言ったことは全て、事実だから。
フォルテは右腕の剣を元に戻した。
「私はジュエルシードを回収します。リンディさんに言われなくても、自分から回収する予定でした」
「ボクもなのはと同じです」
なのはとユーノはリンディに向かって、ジュエルシードは自分の意思で回収すると伝えた。
「わかりました。あなた達にもジュエルシード回収するのを許可するのと同時にアースラ乗艦を許可します」

「艦長！？本気ですか！？」

「本気よ……今ここで彼がキレてしまえば時空管理局は跡形もなく消えてしまう程度では終わらないと思うから」

クロノはリンディが許可したことに驚いたが、リンディは震えていた。

フォルテの本気は管理局が消えてしまう程度ではすまないことを知っている。

「後はあなた達の体を勝手に調べたりして申し訳ありませんでした」

「協力はしますが……こちらから条件があります。それを守らなければ協力すらしません」

セレナードがリンディ達に条件を出した。

?:セレナードとフォルテの名を時空管理局に広めない。

?:体の解析を秘匿をして解析データを全て削除。

?:あくまで、本局には入隊せず、セレナードとフォルテは協力程度する。

?:時空管理局の言いなりにはならずに、命令にも従わない。

?:フォルテとセレナードが戦闘をするときは戦闘終了後、時空管理局はその映像は全て削除する。

?これらの条件はジュエルシード事件だけではなく、これから後にも継続すること。

?どれかを一つでも破った場合、本日を持って時空管理局の本局を潰して、上層部とフォルテとセレナードの情報を知っているもの全てを殺す。

「わかりました。それらの条件全てを守ります」

リンディはすぐに条件を飲んだ。

時空管理局が消えてしまえば混乱して更には秩序が乱れてしまう。

それだけは、なんとしてでも避けなければならない。

フォルテとセレナードが出した条件はイレギュラー発生を防ぐのとネットナビという電脳戦士の技術を時空管理局に広めないためだ。

「わかればいいだけだ。最も、貴様らはそんな条件は絶対に守ることはないと考えている」

「どうしても、信頼しないのですか?」

「……」

リンディは真剣な眼でフォルテを見る。

信頼してほしいとの合図だろうか……。

フォルテの心境を知る人物は誰もいなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

フェイト達は、急いでマンションに戻った。

「フェイト。もう、アイツのいいなりにならなくてもいいんじゃないのかい？」

「これは母さんのためだから……」

「でも、本気で管理局が調査をしたら、ここもバレてしまう……」

時空管理局の存在を知っている。だからこそだ。プレシアの言いなりにならずに、時空管理局に頼る必要があるとフェイトに告げる。

「私は……フェイトの使い魔だよ？フェイトが無理矢理、感情を抑えても精神がリンクしているから……」

「そうだった。私はアルフの使い魔の主だから、精神リンク繋がっていたっけ？」

アルフは床に顔を伏せてから泣いていた。

そんなアルフの頭をフェイトは撫でていた。

「私はもう泣かない。大丈夫だから」

フェイトの瞳には決意が現れていたが、はっきり言えば嘘だった。

（……フォルテに会いたい。寂しい……距離があるけど、やっぱり会いたい）

未だに、フォルテとは仲良くなれずにいた。
フォルテ自身がそれを望んでいるため、仕方なかった。
フェイトはフォルテみたいに、孤独に耐えきれるわけがない。

（え？）

最近、寝るときによく夢を見ていた。
プレシアとその使い魔リニスとフェイトに似た人物がよくプレシアに近づいていた。
プレシアはフェイトに似た人物に笑顔で――。

「……アリシアっていったい誰なの？母さん……」

考えていたら、一筋の涙が零れていた。

第１０話　交渉潰し（後書き）

今回の後書きは無しです。
次回も宜しくお願いします！！

番外編　七夕編（前書き）

今回は七夕の番外編です。

本編とは一切関係しません。

番外編　七夕編

フォルテ
「今回は作者が企画している。ネタか」

セレナード
「そうですね。作者さんのことですから何をするのかは不明ですね」

ムラサメ
「開始早々酷いな。性格が、そうだから仕方ないか」

なのは
「今日は何をするの？　作者さん？」

フェイト
「そうだね。気になるよ今日は」

ムラサメ
「七夕は知っているか？全員？」

リンディ
「確か、笹に短冊を下げてから願い事を叶える行事だったわね？」

ムラサメ
「織姫と彦星が年に一度会うことが出来る日でもあるからさ」

フェイト
「辛いね。一年に一度しか会えないのは……」

ムラサメ
「全ては、事実だ。変えることはできない」

リンディ
「さっそく、短冊に願い事でも書きたいのだけど、紙はあるのかしら？」

ムラサメ
「紙を渡す前に、重大発表がある」

フォルテ
「重大発表？」

セレナード
「なんでしょうか？」

アルフ
「話してくれないかい？重大発表を」

クロノ
「もったいぶらずに、話してくれ」

全員が、作者の重大発表を気にしていた。

ムラサメ
「7月7日は作者の誕生日です！！」

全員（フォルテとセレナードを除く）
『『『えええええええ！！！！！』』』

フォルテ
「七夕に誕生日か……」

セレナード
「誕生日おめでとうございます。作者さん」

フェイト
「おめでとう！！作者さん！！」

なのは
「おめでとうなの！！作者さん！！」

リンディ
「おめでとう。作者さん」

その後、全員で作者を祝った。

ムラサメ
「短冊を渡すからな。一人一つだ」

作者は短冊を全員に渡した。

◇◆◇◆◇◆◇

セレナード
「それより、フォルテは願い事を決めましたか？」

フォルテ
「願いは叶えるためではない。自らの手によって叶えるものだ。そんな、下らない理想の願いには付き合うつもりはない」

セレナード
「相変わらずの現実主義ですね」

フォルテ
「それより、他の連中はどうした？」

願い事を書き終えてから、他の連中達を見ていた。

セレナード
「本当に何を願いましたか？教えてくれないんですね？」

フォルテ
「教える気はない」

セレナード
「グスッ……あんまりです……フォルテは誰に対しても、冷たすぎです」

セレナードは涙目になりながら、フォルテを見る。

そんな状況を全員が、憐れみな眼で見る。

フォルテ
（なぜ、ここまでした眼で見られている？）

性格がそうだから、仕方ない。

セレナード
「私は……そうですね。余り言いたくはありませんが、フォル

テの側にいることですね……」

フォルテ
「オレは……これを見たらわかるはずだ」

めんどくさそうに、短冊をセレナードに渡した。

セレナード
「願いが叶うといいですね……」

セレナードは微笑みながら、短冊を見ていた。

フォルテ
「返してもらう……それが、オレの下らない願いだからな」

セレナード
「相変わらずですね」

セレナードはフォルテの短冊を渡した。

こうして、願い事を書き上げてから全員笹に、短冊をつけた。
今日この日は織姫と彦星が出会う年、この日も全員が当たり前のように過ごしていた。
そんな、七夕を全員が過ごしていた。

願いは一生かけても、叶わないかもしれない。
そんなことは、幻想的で無駄かもしれないし、役に立てないこともあるかもしれない。
それでもいい。今を生きているという素晴らしさに感謝しなくてはならない。

ムラサメ
「ん？フォルテの短冊か……」
作者はフォルテの短冊を見てから、考えていた。
フォルテの短冊の願いはーーー。

ムラサメ
「その願い、叶うといいな……」
果たして、フォルテは何を願ったのかは作者とセレナードのみ知っている。

番外編　七夕編（後書き）

ムラサメ
「はあ……19歳か……」

セレナード
「仕方ありませんよ？作者さん？人間は誰だって年を取りますから」

ムラサメ
「不老不死のセレナードに言われたくはないがな……」

セレナード
「それより、作者さんの短冊に何を書きましたか？」

ムラサメ
「そうだね。まずは、成績アップかな？大学は社会人の前だからと就職先に合格することと後は金だね。自由に遊べるための……」

セレナード
「頑張ってください。作者さん……願っていたら、叶いませんよ？理想と現実は違いますから……遊ぶのはいいのですけど、ほどほどにしてください」

ムラサメ
「保護者か！？独特のオーラがあるぞ……保護者としての……」

セレナード
「フォルテの願いは何ですか？」

ムラサメ
「笑うなよ？笑った人はもれなく、フォルテのダークネスオーバーロードがくる」

セレナード
「わかりました……」

ムラサメ
「戦う以外での新しい自分を見つけることがフォルテの短冊ですね」

セレナード
「素晴らしいですね」

フォルテ
「……人の願いを読むとは……いい度胸だ。……その覚悟、万死に値する……宣言通り、放たせてもらう……」

ムラサメ
「逃げます！！」

フォルテ
「逃がさん！！ダークネスオーバーロード！！」

極太いレーザーを放ち、作者はログアウトした。

セレナード
「次回からは本編です」

フォルテ

「次回も見てくれ。番外編の感想を募集している」

第１１話　気持ち（前書き）

ムラサメ
「はあ……前期試験だるい……」

セレナード
「大学生なら、仕方ありませんよ？」

ムラサメ
「テストは嫌いだ！！」

フォルテ
「……魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ」

第１１話　気持ち

フォルテ達はリンディの交渉を完全に決裂した形で、食堂にいた。
なのは達は転移魔法でアースラを離れたが、フォルテ達は食堂にいる。
フォルテ達は一切食事に、手を出さなかった。
「聞きたいことがあるが、いいか？」
「なんだ？」
「どうして食べないんだ？」
「オレが“人間の餌”を食べるとでも思うか？」
「だが、食べなければ体に毒だ」
食べることを進めるも、フォルテはそれを遮る。
今まで、飲まず食わずの生活をしていたから、初めてフォルテ達を見て、食事を食べていないことに、不思議に思っても無理はない。
「まずは、食べない理由でしたね。私達は人間の食生活をしなくても、生きることができるのです」
「それは作りに関係しているのかしら？」
「下手な追及はしない方が無難ですよ？　まだ私もあなた達を信頼したわけではありませんから」

あの条件を思い出してから、リンディは潔く退いた。
「では次だ。フェイト・テスタロッサの目的を知っているか？」
「知るか……そんなこと……」
「事件解決のためだが、話さないのか「協定を忘れたわけではないな？」っ！」
「オレ達は協力はしない上、人間がどこで何をしようと関係ない」
鋭き眼光でクロノを見る。
「わかった……これ以上の追及はしない」
「わかればいいだけだ。貴様らを信じなくて正しかったみたいだな」
「明日の会議でキミ達は紹介しないが、なのはとユーノは紹介する」
クロノは用事を済ませてから、食堂を後にした。

アースラ会議室

ここでは、リンディ達や他の局員達等といった人達がいる。

なのはとユーノの自己紹介は、緊張ありながらもようやく終え、まわりから、暖かい拍手で迎えられた。

「実はあと二人ほどいるのですが、二人の都合上、紹介できません。スタッフの皆さんは解散してください」

リンディの言葉で、スタッフ全員解散した。

リンディは、スタッフにフォルテ達の名を教えなかった。

それは、フォルテとセレナードが時空管理局に協力する条件の一つである、“時空管理局にフォルテとセレナードの名を広めない”という条件を守っているためだ。

◇◆◇◆◇◆

ここは森の中、ユーノがチェーンバインドで鳥を拘束してから、なのはが鳥に魔力光を触れてから、鳥からジュエルシードが出た。
それを回収してから、封印してジュエルシードを回収する。
フォルテ達はフェイトを探す予定だったが、管理局を警戒していると理解して、捜索をしなかった。
何でも、わかりきったことをするために行動する気はないとのことだ。

◇◆◇◆◇◆

そして、月日が過ぎてからなのは達がジュエルシードを回収する。
フェイト達も回収しているため、残りのジュエルシードは六個になる。
「そういえば、名前はなんですか？」
食堂で、なのはは食べていたときセレナードとフォルテも居合わせていた。
「私はセレナード」
「……フォルテ」

セレナードは普通に話していたが、フォルテはイライラしている。
「フォルテさん……どうして、人間を嫌っているのですか？フェイトちゃん達と一緒でもまるで仲間のように接していないから……つい……」
なのはの自嘲気味な独白を、フォルテは聞いている。
今までのフォルテの経緯から考えていたからだろうか。
人間を信頼していない、どうして、人間を嫌っている理由をなのは理解したいと思っている。
「それを聞いてどうする？
話さえすれば、オレが貴様ら人間を信頼するとでも、思ったか？」
「え……？」
フォルテの容赦なき言葉に重みを感じる。
なのはは聞きたいが、なぜかフォルテの過去を知りたくない気持ちがある。
知ってしまえば、きっと後悔する。
そんなときに、アースラ艇内にアラートが鳴り響いている。

第１１話　気持ち（後書き）

ムラサメ
「ふう……無印もあと僅かですね」

セレナード
「では次回は？」

ムラサメ
「簡単な話だが、フォルテが時空管理局のやり方に不愉快になる」

フォルテ
「……次回も見てくれ……」

第１２話　非情（前書き）

ムラサメ
「今回はテストやレポート作成で、提出したり前期試験があってから、遅れてしまいました」

セレナード
「それは仕方ないですよ。前期試験は大切ですから」

フォルテ
「……」

なのは
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第12話　非情

「あの子なんて無茶を！？」

エイミィは驚愕しながら、モニターを見る。

◇◆◇◆◇◆

海の上で、フェイトが魔法陣の上で呪文を唱えている。

アルフは狼形態で待機している。

（ジュエルシードは海の中にある……電気の魔力流を流し込んでから、ジュエルシードを強制的に発動する……）

フェイトの表情は険しくなる。

「ハアアア！」

フェイトは海に巨大な雷を放ち、ジュエルシードを強制的に発動する。

「はあ……はあ……ようやく……見つけた。残りのジュエルシード！」

かなりの魔力を消費している。

もはや、日頃の疲れで限界を超えている。

（絶対に限界を超えている……ジュエルシード全部封印するのは、無茶だ）

アルフは今のフェイトの状況を見てから、ある一人の人物が浮かび上がる。

（フォルテなら、フェイトを止めていたかな？）

フェイトを止めたフォルテを思い出す。

でも、その考えはすぐに捨てる。

「アルフ！サポートと空間結界を！」

「わ、わかったよ！」

すぐさま、フェイトのサポートに入る。

ジュエルシードは巨大な竜巻になる。

「あの子達なんて無茶を呆れるわ！」

リンディはモニターを見てから、心配と呆れた表情を浮かべる。

「無謀ですね。あれは限界を超えている」

特になんとも感じていないようにクロノは見る。

なのは達は、アラートを聞いてから駆けつけた。

すぐに、ブリッジの転送装置を使い、現場に行くもクロノが遮る。

「その必要はないよ。自滅したところを叩けばいい」
「！？」
「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たした所を狙えばいい」
クロノの非情な選択に、なのはは驚いたが、フォルテとセレナードはイラッとする。
「でも……」
なのはは戸惑いを見せていた。
「オペレーター捕獲の準備を」
「了解」
クロノはオペレーターに捕獲の準備をするように命じる。
「残酷な選択に見えるけど、私達は常に最善な選択をしなくてはいけないの」
リンディは険しい表情になりながら、モニターを見ている。
フェイトはだんだん弱っている。
そんな時に、フォルテがなのはが今の心理状態を見抜いていた。
「行きたいのか？なら勝手に行け。オレは知らん」
フォルテはなのはに合図する。

その声はリンディとクロノは驚いた。
なのは達はブリッジの転送装置に走り出す時にクロノが遮る。
「貴様！？ふざけているのか！？」
「ふざけているもなにもオレは貴様らの存在が本当にゴミくず以下の存在だと認識した」
その言葉から、底知れない怒り、憎しみがわき上がる。
「リンディ……貴様は常に最善な選択をするらしいな」
「ええ……」
「たかだか、子供一人を拘束するのにここまで腐れた真似をするのか？」
「どういう意味……っ！」
リンディはフォルテの怒りに身震いをする。
「腐れた真似をするなと言った。貴様らは本当に腐れている。オレの知る“あの連中”となんら変わらない」
「あの連中？」
なのはは戸惑う。
あの連中はフォルテが人間の中で最も憎んでいる解析スタッフや科

学者の連中だ。

「なのは……行っても構いませんよ？」

「え？」

「フェイト・テスタロッサに私達より自分の心配をしてくださいと伝えてください」

その一言を残してから、なのはは急いでブリッジの転送装置に急いだ。

「貴様ら！！全員命令違反だ！！処罰の覚悟できているな！？」

「知るか……人間の腐れた命令など……」

フォルテは無愛想に、クロノを睨む。

「……ああいう指示をしたのは、机の上でのうのうと座っている頭が腐れている、爺や婆ども。更に欲望に飢えたハイエナごときの指示を守らなかったからという理由で処罰を下すなら、今すぐ、時空管理局を跡形もなく消す」

クロノの処罰を完全にフォルテは無視して、時空管理局を破壊を決行する。

「安心してください。もう二度と、あなたを時空管理局に働かせない様に、魔導師として再起不能にするまで、叩き潰してあげますから。もちろん、社会的な意味で潰しますよ？権力ごと全て」

セレナードの眼は笑っていないで、黒い笑みを浮かべる。
セレナードの黒い笑みに恐怖を覚えた。
全員は恐怖で震え上がり、フォルテは震えていないが、冷や汗を流す。

「クロノ！！そこまでにしなさい！！」

「艦長！？どうしてですか！？」

「忘れたの！！あの二人が協力する条件を！！」

「！？」

リンディはフォルテとセレナードが協力する条件を思い出した。

「あの二人は時空管理局の言いなりにならず、命令に従わない。この条件を既に破っている」

「！！」

「条件を破れば、私達全員を彼らは消そうとしている。そのことを忘れないで」

「わかりました……」

リンディの一言で、クロノは黙る。
クロノは舌打ちしてからフォルテを睨む。

（アイツのせいだ……アイツの……）

クロノは怨みと憎しみをフォルテにぶつける。

フォルテはそんな奴を知らないふりしている。
最も、誰かに嫌われることに対しては、フォルテにとって、慣れているため、そんなことはどうでもよかった。

◇◆◇◆◇◆

竜巻の威力が増してから、フェイトの魔力刃は消えかかる。
「！」
フェイトの眼に写るのは、バリアジャケットを纏ったなのはだった。
アルフはフェイトの邪魔をしに来たのかと勘違いしていたが、ユーノは違うと説得する。
「ユーノ君はサポートをして！」
ユーノは頷いてから、魔方陣を展開して、緑色の鎖で竜巻の動きを止める。
ユーノだけでは竜巻は完全に制御できずアルフも魔方陣を展開して、オレンジ色の鎖を出してから竜巻の動きを制止する。
「フェイトちゃん！」
なのははフェイトの側に行く。
「二人で一緒に封印するよ！」

なのははレイジングハートを構える。
フェイトはバルディッシュの魔力を元に戻した。
「ディバインバスターフルパワー！」
巨大な魔方陣を展開して、チャージする。
フェイトも巨大な魔方陣を展開する。
「ディバイン……」
「サンダー……」
互いに狙うターゲットは既に決まっている。
後は、そのターゲットめがけて、全力で放つのみ。
「バスター！！」
「レイジー！！」
桜色の閃光と金色の閃光が竜巻めがけて直撃する。
竜巻が消滅してから、曇天な雲に晴れ間が差し込まれている。
それと同時に、ジュエルシードが六つ現れて、ジュエルシードが封印する。
それを半分ずつにわけた。
「ジュエルシード六つ封印完了しました！」
「な、なんて出鱈目な！」

「まずは無事でなによりね……」
アースラでも、リンディ達は安心感を得ていた。
「……」
フォルテは無愛想にモニターを見る。
そして、ロックマンのことを思い出す。
（想いは人を強くする……か……）
自嘲気味に、なのはとフェイトが竜巻を止めた時の映像を思い浮かべる。
なのはという少女はフェイトと話をしたい、という想いがある。
その事を考えると、諦めない強さがロックマンに似ている。
フォルテが認めた最強のライバルに。フォルテと同様に無限の可能性を秘めた唯一の存在であると共に、フォルテが初めて、敗北した強者（ロックマン）を思い浮かべる。
（考えすぎたか……人間を考えてしまうとはな……オレらしくない……）
フォルテは今までの思考を切り捨てる。
そんなフォルテの表情を見てから、セレナードはキョトンとしている。
「フォルテ……」
「なんだ？」

「大分、変わりましたね」
「さあな。人間に対する、態度を変えた覚えはない」
誰にも聞こえない声で、セレナードとフォルテは話している。
どこか、愛想なく返事し、背を向ける。

◇◆◇◆◇◆

「えっと、半分ずつでいいよね？」
なのははジュエルシードを互いに、半分ずつ分けることに、フェイトは黙って頷いた。
ジュエルシードを半分受け取ると、目的を終えたのかすぐにその場を立ち去る。
「待って！」
なのはの呼び掛けに、フェイトは立ち止まるも、振り返ることはない。
「ある人物からの頼みで、自分の心配をしてくださいって」

「え？」

「それだけだから……」

なのはは、その言葉を残したら、フェイトは満足したのか今度こそ、その場を立ち去る。

◇◆◇◆◇◆

フェイトとアルフはマンションに向かう。

（なんだかんだで、心配してくれたんだね）

フォルテの性格からすれば、他人の心配することは絶対にあり得ないがセレナードなら、あり得た。

（ありがとうフォルテ……セレナード……）

フェイトは、フォルテ達に感謝していた。

第12話　非情（後書き）

フェイト
「そういえば、作者さん？」

ムラサメ
「なんだ？」

フェイト
「フォルテにとって、私はどういう風にとらえているの？」

ムラサメ
「人間嫌いである以上、フェイトやなのはと関わることは無理だと思うな」

フェイト
「じゃあ……恋愛は？」

ムラサメ
「フォルテは鈍い以前の領域で、他人と関わることやつながりが一番嫌っている。言い方は酷いが、恋愛感情は皆無だ。どうしょうもない」

フェイト
「そ、そんな……」

ムラサメ
「言い過ぎたな、それがフォルテだ」

フォルテ
「……」

セレナード
「次回は『決闘』ですね。タイトルだけで、わかる人はわかりますけどね」

フォルテ
「……次回も見てくれ」

第13話　決戦（前書き）

ムラサメ
「さて、今回は決戦前の出来事です」

フォルテ・セレナード
「「……魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ（始まります）」」

第13話　決戦

「あなた達、全員反省しているのかしら？」

現在、リンディがいる部屋でなのは達全員リンディとクロノに説教を受けている。

「全くジュエルシードを半分渡すとは……」

「どこの馬鹿な組織の連中ごときにそんな台詞は言われたくない。貴様はあの現実を変えきれたのか？」

「奇遇ですね。私も同感です」

クロノは呆れていた。

フォルテとセレナードは反省している態度ではない。

むしろ、時空管理局の対応の悪さが原因だと確信する。

「あなた達、本当に反省しているの？」

「なぜ、反省する意味がある？」

「反省するときに反省しないなら嫌われるわよ？」

リンディは優しい口調で、フォルテに説教をしていた。

フォルテは反省はしていないし、ましては他人から嫌われることを恐れてすぐに、言いなりになることは絶対にない。他人は、所詮他人。フォルテは他人からの評価など、どうでもよかった。

「……ここまで、反省しないとはな」

「貴様だけには言われたくはない」

クロノは腕を組みながら、ため息を吐いてフォルテを見ていた。
フォルテは無愛想に返答する。
その後も、簡単に注意する程度で終了した。

◇◆◇◆◇◆

「それでこの１０日はそんなことがあったの」

「そうですか」

すっかり、意気投合している。なのはを一時的にアースラから家に帰した。何でも、義務教育がまだ終了していないからそちらを優先すべきとのことだ。
学校に通っている以上、休みすぎはダメとのことだ。

（まさに、フィクションな展開の話だ。全く関係ないみたいに）

ユーノは苦笑しながら、なのはの母、高町桃子とリンディの話を見ていた。
後この場所にいたのは、兄恭也に姉美由希、父士郎とフォルテとセレナードがいた。
そして、フォルテはその場を静かに去る。
誰にも気づかれることなく。

◇◆◇◆◇◆

「……」

誰もいない公園で静かに眼を瞑る。

「……昔のオレならあんな連中はすぐに殺せただろうな」

過去のフォルテなら、なのはやフェイト等の人間は一瞬で始末しているはずだ。
それでも、始末できないということは変わってしまったのか。変わったからとはいえ、フォルテ自身は人間に対する態度を変えるつも

りはない。

「行く宛もなく、ただ浪々に流れていくか……。戻ったとしても、暇だからな」

ゆっくりと歩きながら、適当に歩き始める。

なのは達のところに戻るという選択肢もあるが、それは始めからなかった。

その頃、高町家では。

「そういえば彼は？」

「見なかったのか？彼を？」

「全く見なかった。いつの間にいなくなったんだ？」

リンディ達が、話を終えてから一息休憩を入れてから、フォルテを探していた。

ぬらりくらりといつの間にかいなくなったことに驚いていた。

（恐らく人間のいるこの場所が嫌いで、別の場所に行ったようですね）

セレナードはフォルテがいなくなるのを見ていなかったが、フォルテがぬらりくらりと消えていた理由もすでに知っているため、心配

しなかった。

（フォルテは問題を起こすような真似はしないでしょう……。多分）

セレナードは顔を上げてから、窓の空を見ている。

◇◆◇◆◇◆

フォルテは適当に歩き出したら、車椅子から落ちて、泣いている少女がいた。

「誰か……助けて……ください……」

少女の叫びに、誰もが見て見ぬふりをしている。更には、迷惑だからと言って罵倒する人間もいた。

少女は泣きながら、謝っている。

「人間はどこの世界も愚かで醜い存在だ」

フォルテはすぐに人間はクズと囁いた。

そして、少女に近づいた。

「……貴様」

「ひっ！！」
少女は少しビビっていた。
フォルテが怖いからだろうか。
「立てるか？」
少女は首を横にふった。フォルテは立てないことに気づいた。
「仕方ない……嫌かもしれないが、これで我慢しろ」
フォルテは車椅子を元に戻した後、少女を横抱きにしながら、少女を抱えた。
「ふぇ……」
少女は突然すぎる展開に唖然としながら、フォルテを見ていた。
フォルテはそんな少女の表情を見ることなく、無愛想に少女を車椅子に乗せる。
「これでいいな？」
「は、はい！」
「他にすることはないな。ならば、帰らせてもらう……」
フォルテはその場を後にしたが、少女が呼び止めていた。
「あの……」

「もう用はないハズだ。大人しく帰れ」

「できれば……御礼がしたいのですが……」

「人間の礼など……、受けるつもりはない」

「御礼はしませんが、家の前までお願いできますか？」

少女はどうしても、自分を助けてくれたフォルテに御礼をしたいらしいので、フォルテはそんな少女の態度に呆れた。
人間にお礼を受けたことがないからか、あそこまで優しくするつもりなど皆無に等しい。
仕方がないので、フォルテは更に不機嫌になりながらも車椅子を押し始める。

「どうしてそんなに不機嫌なん？」

「……」

少女は不思議そうに、フォルテの顔を見る。

「貴様には関係ない」

その後、ただ沈黙の雰囲気が流れていたのか話しかけることはなく、ただ少女の家まで車椅子を押した。

「ここや！私の家は！」

数十分が過ぎて、少女の家にたどり着いた。

「ありがとな！ここまで送ってくれて！」
少女は感謝の言葉を述べていた時に、フォルテは表情を表に出さないが、どこかイライラしていた。
「オレが望んで貴様を助けたわけではない……。貴様がどうしても助けてほしいと言ったから助けただけだ」
フォルテはマントを翻して背を向ける。
少女が声をかけたときには、フォルテはすでにいない。
少女はその光景をただ呆然と見ていた。
「素直じゃあらへんなぁ。感謝することがそんなに悪いことなんか……」
少し罰があるような言い方で彼を思い出す。
その後、すぐに家に入る。

◇◆◇◆◇◆

フォルテは高町家に戻る前に、フェイト・テスタロッサがいるマンションに行くと考えていたが、会う気分になれないのかどうかは知らないが、それはなかった。

「戻るか……」
フロートで浮きながら、誰にも見られることなく、立ち去る。

「フォルテさん！」
「……」
帰ると、偶然なのはと遭遇して地面に降りた。
「今までどこに行ってたの？皆、心配していたんだよ？」
「貴様らには関係がない。オレがどこで何をするのかは知る必要がない」
「どうして……そこまでして私達から遠ざけるの！」
「うるさい餓鬼だ……。
黙れ」
「でm「これ以上話すなら今すぐ殺す」っ！」
なのはの問いかけに、フォルテは殺気はないが、睨む。
車椅子の少女と一緒にいたからか、更に不機嫌になっている。
「貴様には関係ないことだ。忘れろ」

「……」

その後も、ただ沈黙の空気が漂わせる。

数日後。

「なぜ貴様の決闘に付き添うために早起きするのか説明しろ」

「にゃはは……」

フォルテの愚痴に、なのははただ苦笑した。

「別にいいじゃないですか？」

「それからそこまでくっつく意味あるのか？」

セレナードに眼を配ると、上からパーカーを羽織っている。桃子辺りにもらったのだろうか。正直、どうでもよかった。

「……時間だ。ユーノはわかっているが手出しはするな？」

「わかっているよ……。それくらい」

「いい加減離れろ。セレナード」

「……わかりました」

どこか不満そうに、渋々離れていた。

朝日が登り、風が強く吹き荒れている。

その時ーーー

「来たか……。
フェイト・テスタロッサ」

「フォルテ……」

「安心しろ……手出しはしない」

バリアジャケットを纏いながら、デバイスバルディッシュを構えているフェイト・テスタロッサと狼形態のアルフが現れた。

「貴様もわかっているが手出しするな……」

鋭く睨みながら、二人の戦いに邪魔をするなと忠告する。
アルフとユーノは黙って頷いた。

「まだ始まりにも達していない……。
賭けるのは互いのジュエルシード全て」

なのはの条件に、フェイトは黙って頷いた。
互いの、デバイスを構えている。

「始めよう！最初で最後の全力勝負！」

第13話　決戦（後書き）

ムラサメ
「アンケートです」

フォルテ
「……急にだな」

セレナード
「そうですね。今回はどんなアンケートですか？」

ムラサメ
「ポケモンの二次創作の小説を連載するのかどうかについて」

セレナード
「……シリーズはどうしますか？」

ムラサメ
「ＢＷでプラズマ団事件を解決した後で、別の地方に旅します」

フォルテ
「今回はオリ主が主人公か？」

ムラサメ
「今回はオリ主が主人公です」

セレナード
「実力と手持ちは何でしょうか？」

ムラサメ
「それは秘密です。連載開始まで秘密ということです」

セレナード
「わかりました。アンケートの方を宜しくお願いします」

ムラサメ
「アンケートの結果次第で連載するのかどうかを決めます」

フォルテ
「期間は9月5日までだ」

セレナード
「それではアンケートと次回も宜しくお願いします」

第１４話　真実と想い（前書き）

ムラサメ
「今回はあの二人の決戦です」

セレナード
「どちらが勝ちますか？」

ムラサメ
「詳しくは本編で」

フォルテ
「……魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ」

第１４話　真実と想い

「始まったか」

「見たいですね」

フォルテ達はフェイトとなのはの戦いを見ている。

「どっちが勝つのか予想できているのかい？」

「さあな……」

「わかりませんね。どちらが勝つのかは」

セレナードも全く予測できない。

「でも、私はフェイトかな？あんな子にフェイトが負けるわけがない」

「その考えを改めたらどうだ？」

「どういう意味だい？まさかあんな子供がフェイトに勝つ？」

「戦いにおいて絶対はない……。が、ある程度の考え方次第では絶対はあり得るかもな……」

無愛想に確定している勝利することについて、考えることを改めることを追及する。

「どうやら仕掛けるつもりだな……」

「そうですね」

「あれは……。ライトニングバインド！？あの子を本気で潰すつもりだ」

アルフはフェイトのバインドでなのはを拘束していて、呪文を唱える光景を目の当たりにする。

「なのはのサポートを！」

ユーノもアルフの現状を知り、バインドを解除するためになのはのサポートをする。

「やめろ……。あの二人の決闘に水を差すな」

「フォルテ！！フェイトのあの攻撃は本当にヤバイんだよ！？」

「だから何だ？それで終わるようではなのははそこまでの奴だったということだ」

どこまでも冷たく突き放すも、それが戦いの中での現実。
なのはが危険な状況にも関わらず手出しはしない。
ユーノも反論したいが、フォルテの言ったことは正論なだけ、苦虫を握り潰したような表情でなのはを見据える。
なのははバリアジャケットをボロボロになりながらも、致命傷は避けていた。

「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！」

魔方陣を展開してから、ある魔法を発動する。
フェイトはバインドで拘束されているため、動けない。
「全力全開……スターライトォォォ……」
レイジングハートを振り上げる。
「ブレイカァァァァ！！！！！！」
魔方陣からディバインバスター以上の極太い砲撃が放たれる。
フェイトは抵抗できずにスターライトブレイカーの光に飲み込まれた。

「何て馬鹿げた威力だ……！！」
アースラでなのはとフェイトの戦いを見ていたクロノは唖然とする。
エイミィとリンディもクロノと同じく呆然としていた。

◇◆◇◆◇◆

フェイトはスターライトブレイカーのダメージで海へと墜ちる。

「フェイトちゃん！」

なのはが駆け寄るときに、フォルテが通り過ぎた。

「速い……目に見えないよ……」

フォルテの速さに唖然としていた。

「あれ……ここは……？」

フェイトは目をゆっくりと開いた。

海へと堕ちているのに、堕ちていない。誰かに支えてもらっているのかなと疑問を抱きながら見る。

「敗北したみたいだな……」

「フォルテ……」

「どうだ？今の気分は？」

「それ答える前に……この体制はないかな……今すぐ離れてくれたら嬉しい……」

今のフェイトの状態はフォルテに横抱きいわば、お姫様抱っこだ。

フェイトは恥ずかしさが故に、どんどん赤くなる。

（……変な奴だ。顔を真っ赤にするとはな……）

そんな感情に気づいているわけもなく、ただフェイトから離れる。
「フォルテ。……ゴメン負けちゃった」
「気にすることはない、負けを知ることも強さの一つだ」
「わかっているよ。……次はなのはには負けないから」
自分の敗北を認めてから、次は勝つという決意に満ちた表情をする。
地上から、ユーノとアルフ、セレナードが出迎えてくれている。
『プットアウト』
バルディッシュにある残りのジュエルシードを全てだす。
なのはもゆっくりと近づいてくる。
「！フェイト・テスタロッサ！今すぐオレから離れろ！！」
フォルテは雲の変化に気づいた。
フェイトを守るため、フォルテはフェイトを離す。
それと同時に、フォルテに雷が直撃する。
「プレシアの狙いはジュエルシードを回収し、フェイト・テスタロッサを潰すことか……。チッ、オレとしたことが……」
傷自体は大したことはないものの、表情が歪みながら、怒りを表に出さないで雷を放つ場所を見ている。

◇◆◇◆◇◆

「っ！ゴホッ！ケホッ！」

プレシアは時の庭園で血を吐いている。

「もう限界ね。……さっきの一撃で力が入らない……」

次元魔法の影響で、体に限界を感じている。

◇◆◇◆◇◆

アースラでは、フォルテ達全員がいる。

「はじめまして、フェイト・テスタロッサ。私はリンディ・ハラオウンです」

「は、はじめまして」

互いに挨拶を済ませる。フェイトを拘束する局員もいたが、リンディが許可しなかった。

（このまま母親を逮捕させる映像は見せてはいけない……。なのはさん？）

（は、はい！）

（今すぐフェイト・テスタロッサさんを医務室辺りに連れていって

あげなさい）

念話で会話が終わり、なのははフェイトを医務室へと誘導する。

『な、何だ！？これは！？』

モニターから局員が隠し扉を見つけてから、中からケースを見つける。ケースの中にはフェイトと瓜二つな姿をしていた。その光景を、なのは達もモニターを見ていた。

『アリシアに近づかないで！』

『ぐわあああ！！！！』

プレシアの雷が局員を襲う。

「いけない！今すぐ帰還して！」

リンディは今すぐ局員を転送した。最悪、負傷者はいなかった。

「アリ……シア……？」

『やはり見てしまったのね……』

「え……？」

今の状況を頭の中で、整理しようと必死になり混乱している。

「……確か、プレシアには当時ある一人の娘がいた。その娘は交通事故で亡くなったと記録されている。開発コードはフェイト。当時

の彼女の研究につけられていた開発コード」

「さすがは管理局ね……」

エイミィが険しい表情で話す。ここまで、調べ上げたことにプレシアは少しばかり称賛する。

『私は……フェイトを造り上げてから、しばらくしたら嫌いになった……』

「！？」

プレシアの打ち明ける真実にフェイトは体全体が、震え上がる。

プレシアはでも……。と続ける。

『私はようやく気づいた。フェイトの気持ちやフェイトが何を求めていたのかを……』

「……」

プレシアは目を開いて、話す。アースラにいる全員は黙って聞いている。

『……ある一人の人物によって、私は自分を一から見つめ直して考えることができた。私の勝手な都合のせいで、フェイトを嫌い……すぐに新しい欲望へと目を向けてしまった。

ある一人の人物から教えてもらわなければ、私は一生わからなかったかもしれない。何のために造り上げては捨てられ、傷ついてしまうフェイトの気持ちを……』

プレシアは涙を流す。
余りにも、辛かった。アリシアとフェイトが、プレシアを嫌い一人孤独になることを。
フェイトは耐えきれなくなり、涙を流す。
なのはもフェイトと同様だ。
捨てられ、傷ついてしまうことがどれだけ辛いのかを。

『最後になるわ……』

プレシアは涙を拭りほどいた。フェイトも同様だ。

『フェイト……私はあなたのことを大切な娘として見ている。だから伝えます』

少し微笑みながら、伝えた。

『私は……あなたのことが大好きです』

第１４話　真実と想い（後書き）

ムラサメ
「……無印編もクライマックスだ」

セレナード
「頑張ってください」

ムラサメ
「アンケートは継続しています。アンケートの内容は第１３話の後書きを見てください」

セレナード
「アンケートの方も宜しくお願いします」

フォルテ
「今回はここまでだ。次回も見てくれ」

第１５話　偽り（前書き）

ムラサメ
「すみません。追試やら自動車免許の本試験やらで忙しかったので遅くなりました」

セレナード
「今回の話は何でしょうか？」

ムラサメ
「詳しくは本編で」

フェイト
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第１５話　偽り

『私は……あなたのことが大好きです』

今度こそ嘘偽り関係なく、本当の笑顔で想いを告げた。

「う……あ……」

フェイトは大きく崩れてから、地面に座る。
瞳から、大粒の涙が溢れていた。

『それからアルフ。
フェイトのことお願いね』

「プレシア……」

アルフはただ頷いた。

『マントを纏う彼、あなたのお掛けで変わるきっかけを作れたわ。
フェイトの事を頼んだわよ』

「……」

さも平然にモニターを見据える。
なのはにも、礼をいいプレシアはモニターを切る。
アースラから、緊急アラームが鳴り響く。

「プレシアのいる時の庭園から、魔力反応が！！数は５０、８０と数を増やしています！！」

局員からの報告を聞いていた。
「次元震です！中規模以上！！」
「振動防御！ディストーション・シールドを！」
「ジュエルシード９個発動！次元震、更に強くなります！」
リンディが周りの局員に指示を出す。
「規模が更に拡大！このままでは次元断層が！！」
周りの局員が急激に慌ただしくなる中、フォルテはいつもの様に無愛想な態度で見る。
どこか、苛立ちを隠しながら。
その後も、局員からの報告で次元断層の予測値が後３０分足らずで発生すると報告する。
「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロギアです！それを発動させて、足りない出力を補っています！！」
エイミィは、顔を険しくした表情で説明した。
「フォルテ……アンタは全てを知っていたのかい？アリシアの事も、あの女の計画も」
アルフは体を震わせてから、フォルテに全てを知っているのかどう

かを聞いた。

「……」

無愛想に黙り続けている。アルフは、そんなフォルテの態度が気に入らないのかどうかは知らないが、更に声を高くする。

「答えてよ！！知っていたのか、どうかを！！」

「……ああ、全てを知っていた」

その答えを聞いたときに、アルフはフォルテを殴る。

誰もが、殴られたと思った。

「……殴った所で、果たして解決するのか？」

片手で、アルフのパンチを防いでから見据える。
フォルテはアルフの手を離すつもりはなく、ただ握り締める。
「……貴様はオレを殴り、それで解決するなら、それは貴様が納得していないという理由で強引に解決させる、言わば自己満足な解決策だ」
フォルテの苛ついた口調をアースラにいる全員が聞いていた。
「そ、それは……」
「知りたくもない、真実は持っていて、当然だ」
誰もが、真実を求めている。それが故に、知らない事実には対応が遅れ、遅かれ早かれ隠し事はバレる。
「フェイト・テスタロッサ……医務室に行くぞ。貴様に聞きたいこともあるからな」
アルフの拳を離してからマントを翻して、フェイト・テスタロッサと一緒に医務室に向かう。

◇◆◇◆◇◆

医務室に来てから、フェイト・テスタロッサはベッドの上に座り込む。

「……オレが憎いか？確か、貴様はオレを信じていたな」

背を壁に当ててから、フェイトを見る。

「オレが嫌いなら、嫌いになれ。それを決めるのは、オレではない……貴様自身だ」

「……」

フェイトはただ、黙ったまま、下を向いていた。

フォルテはそんなフェイトの態度を見てから、マントを翻して医務室を後にする。

「フォルテは私の事を考えたんだよね？今まで、真実を黙り続けていた事は……」

フォルテは足を止めた。

「……さあな。貴様はどうしたい？プレシアを救いに行くのか？」

「私は、母さんを救いたい……」

「プレシアの元に来ても、裏切られるだけだ」

フェイトの救いを、否定している。

フォルテは既に知っていた、救っても、また裏切られる事を……。
だからこそ、裏切られてもなお立ち上がるフェイトがフォルテには考えが全く理解出来なかった。

「人間の優しさを全く知らないんだね」

「……人間の優しさ等、知るつもりはない……」

そう言った後、互いに、沈黙の雰囲気が醸し出していた。

「母さんの笑顔は……悲しそうな、笑顔だった……あんな笑顔は見たくない……本当の笑顔を見たい……」

フェイトはプレシアの笑顔を見たい。
そのために、今まで危険ながらもジュエルシードを集めてきた。
フォルテはフェイトの心理を聞いた時には、眼を瞑っていた。

（ロックマン……仮に貴様がこの場にいたら、どうしていたんだろうな……既にわかっている。答えは……）

ロックマンがそんな事を聞いたら、すぐに助けに行く。どんな罠が待ち受けようと、関係ない。

（助け出す……それが、奴の答えか……オレからすれば哀れだが、奴らしい答えだ）

フォルテはロックマンのやる事を既に知っている。

フェイトはバルディッシュを構えて立ち上がる。

「……行くのか？」

「私はまだ始まったばかり。まだ、スタートラインすら立っていない。

もちろん、フォルテもついて来るよね？」

「……勘違いするな。貴様の救うべき、助けのために行っている訳ではない」

フェイトが医務室を後にした後、一人残って仕方無しに、何時からお人好しになったのだろうなと考えていた。

「……」

無言のまま、医務室を後にして、不機嫌になりながらも仕方無しにアースラの転移ポートまで行った。

時の庭園に転移して、ついたらなのは、アルフ、ユーノ、セレナード、クロノがいた。

「……敵か」

敵の気配を察知して、時の庭園の中に入るとまるで、歓迎してくれたかの様に傀儡兵が現れる。

「……先に行け。コイツらの相手は、オレが仕留める」

「無理だよ！！たった一人で！！」

「フェイト。行きましょう」

「セレナード！？」

フェイトも加勢する時に、セレナードが遮る。

「……早く行け。貴様の大切な者とやらを救いにな……」

片手にエネルギーを少し溜めて傀儡兵を破壊する。

「わかった……必ず後からついてきてね。フォルテ」

フェイト達は、走り出す。

傀儡兵も、それに反応してフェイト達を襲撃するもフォルテのエネルギーで破壊する。

「行ったか……これでいい……」

フェイト達が先に行ったのを見据えてから、楽になる。

フェイト達には見せるつもりは一切ない。

フォルテの通り名、裏インターネットのネットナビからこう呼ばれていた。

“闇を纏う、黒き破壊神”

人間がいないこの場所なら容赦はない。

次から次へと傀儡兵が更に増えて、入り口を固める。
フォルテはそんな傀儡兵相手に動揺する事は無く、ただ見据える。
その時、フォルテはフッと不敵に笑う。

「傀儡兵ども……かかってこい。貴様ら全てを破壊する」

フェイト達は、フォルテを入り口に残して最下層を目指す。
傀儡兵は現れるも、なのは、アルフ、ユーノ、フェイト、クロノは魔法駆使し、セレナードは接近と遠距離技を使いながら、敵を蹴散らす。
「！！また、傀儡兵か！？どんだけいるんだ！？」

クロノは先に進めず、イライラしていた所だ。その焦りから、故に自分を見失いやすい。

「ホーリーブレイカー！！」

ズドーン！！

セレナードは手から光を纏わせて、エネルギーを放つ。傀儡兵は一撃で破壊する。

「先に行ってください。足止めは私がします」

「で、でも！？」

「フェイト・テスタロッサの道は私が作ります。ホーリーブレイカー！！」

ズドーン！！

再び、最下層への道を作り上げた。

「ありがとう。セレナード、道を作ってくれて」

セレナードはその場に残り、なのは達は先へと急いだ。

「フォルテと違って……人間に馴染めていますが、やはり……」

眼を閉じてから、ふと考える。
人間がどの様な存在なのかをーーー
「深く考え過ぎましたね……さて、入り口の傀儡兵はフォルテが始末している。あんな、兵隊相手に負けるわけないですがね……」
再び、庭園に増えている傀儡兵を始末する前に宣言する。
「ここから先は私が相手だ。かかってきなさい。作られしあなた達は、破壊される事を望んでいるのなら……」

第１５話　偽り（後書き）

ムラサメ
「自動車の免許取れました」

セレナード
「三回目でしたね。まずは、自動車の免許取れておめでとうございます」

フォルテ
「……そうか」

ムラサメ
「無愛想だな」

セレナード
「そうですね」

フォルテ
「自動車の免許取れて、天狗になるな」

ムラサメ
「うぐっ！？」

セレナード
「今回はここまでです。次回も楽しみにしてください」

第１６話　決戦（前書き）

ムラサメ
「今回はフォルテとセレナードがメインです」

フェイト
「私の出番は？」

ムラサメ
「今回はない」

フェイト
「そ、そんな」

フォルテ
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ」

第16話　決戦

「……最初に潰されたい奴は誰だ？」

時の庭園の入り口付近では硬直状態が続いている。
フォルテは眼光で見据える程度、傀儡兵は動かない。

「ダークアームブレード！！」

剣を出して、握る。
ダークアームブレードの刃を傀儡兵に向ける。
その瞬間ーーー

ズバッ！！

傀儡兵がまっ二つに斬れた。
一瞬、何があったのかはわからない。だが、かなりの距離から、何かを放たれた事はわかる。

（出来れば、使いたくはなかったな……この技は……）

本当は、この技を使用しないで、全てを蹴散らす予定だったため、仕方なく思う。
次々と、やられた傀儡兵を補うかの様に、どんどん時の庭園の中から侵入者を傀儡兵が現れている。

「一回試すか。ダークネスソニックブーム！！」

バトルチップ“ネオバリアブルソード”の緑色の真空刃に似た漆黒

の真空刃を剣から発生させて、傀儡兵目掛けて放ち、一気に斬り刻む。

漆黒の真空刃だけで、軽く１０体以上は貫通させて、まっ二つに斬れてから破壊する。

フロートを使い、傀儡兵の懐に入り、斬る。

速さと正確さで、次から次へと粉砕する。

背後から手を伸ばした傀儡兵も全て倒した。

（動きがワンパターンすぎる……つまらないな）

フロートで距離を取り、浮いてからつまらなさそうにイライラしていた。

ダークアームブレードを解除して、元の腕になる。

「さて、一気に滅するか……」

腕を小型版ゴスペルに変形した。

ゴスペルからエネルギーを溜める。

「全てを消し去れ！！バニシングワールド！！」

小型版ゴスペルから、巨大なエネルギーを放つ。傀儡兵は爆発して、次から次へと爆発の余波に巻き込まれて、破壊する。

「随分と呆気ない、戦いだったな」

フォルテは小型版ゴスペルを解除して、元の腕に戻した。

「……」

傀儡兵が破壊された入り口付近にいて、そのままフロートを使い、時の庭園に潜入する。

◇◆◇◆◇◆

「終わりましたね……つまらなかったのですが……！」

哀れな眼で、全てを破壊した傀儡兵を見据えている。

その刹那、鋭い爪が襲いかかるも、アルカディアスブレードで防ぐ。

「猛獣……まさか……ですね……」

防いでから、素早いスピードで移動している者が目に見えた。

「ガルルルル！！まさか、こんな所で、裏の王と会うとはな」
「ロックマンに倒されたはずのあなたが、なぜ……」
少しばかり、驚きながら二足歩行の猛獣を見る。
「オレ様は蘇った！！貴様らを倒すためにな！！」
「貴様ら？他にも対象がいるのか？お前は、私達と同じはずの“ネットナビ”がなぜ、現実世界に？」
「それを知って……どうする！！」
猛獣がスピードを上げてから、爪でセレナードを襲いかかる。
（速さは……完全に私とフォルテ以下だが、それでも、並の人間には見えるハズがない……）
正確に、狙うもアルカディアスブレードで防いだ。
そして、剣と爪がぶつかり合い火花を散らす。
互いの、剣と爪捌きで目にも見えない早さで激突する。
「！？身体が！？痺れている！？」
突然、地面に倒れる。
体が麻痺している。
まさか、爪に……
「気づいたか？裏の王にしては反応が遅すぎる！！」

二足歩行の猛獣は、足を使い、セレナードを蹴る。
手で防ぐも、勢いが加算しているのか、その衝撃で、そのまま壁に激突する。

「弱いな！！裏の王！！まさか、ここまでーーー！？」

勝利した事に、雄叫びを上げるも、何か強烈なプレッシャーが襲いかかる。

「どうやら、貴様の認識を甘く見すぎた……。ビーストマン」

殺気は無に等しいが、周りの空間に威圧感を放つ。
先程までの雰囲気とはまるで嘘であるかの様な威圧感だ。
並の実力者が相手ならば威圧感だけで耐えきれないだろう。

それほどまでの圧倒的な威圧感だ。

（これが、裏の王の威圧感……予想以上にやべぇ……）

その威圧感に後退りをしてしまう。

ある程度の予想はしていたが、これほどまでの威圧感の高さには冷や汗が出る。

「どこを見ている？」

（なっ……！？いつの間に……このオレが背後をとられている……だと！？）

背後から、突然声が聞こえている。その声を聞いた時には、ビーストマンは驚愕する。

速さに、自信があるため自分よりも速い存在は見た事がない。

「やはり、この爪には電撃を仕込ませているのか……道理で痺れるわけだ」

アルカディアスブレードでビーストマンを斬り刻む。

「最後の質問だ……なぜ、“ネットナビ”である貴様らがここにいる」

「ちやほや……教えるかよ。敵にな」

「そうか……ならば、答える事が出来なかった。恨みはないが、今すぐ消えろ」

アルカディアスブレードを横に振る。
その時に、真空刃が出来上がる。
「絶空刃」
真空刃でビーストマンを貫通させるも、スピードを使い、絶空刃を回避する。
「ビーストクロー！！」
右腕の爪を使い、背後からの襲撃を狙う。
「だが、残念だ。貴様の敗けだ」
難なく回避して、アルカディアスブレードを解除してから、浮いてからエネルギーを溜める。
「終わりだ！！ホーリーブレイカー！！」
エネルギーをビーストマンに直撃する。
突然、足に痛みがきてから、回避できずに大打撃を受けてから地面に転がる。
（なぜ、オレ様は動けない！？まさか！？）
「ようやく気づいたか……私がただ斬り刻むだけだと思ったか？」
「あの時か！？」
「そうだ。あの時、ビーストマンの最大である足を斬った」

最初に牽制した際に、足に多少斬り刻んだ。
速さが、特徴ならまずは要である足を狙い、まずは行動を停止させる。
わざとやられたのも、全てはこのためである。

「ば、馬鹿な！？オレ様は再び、負けるだと！？」

「ああ……貴様はここで終わる」

「ふっ……ふっふっふっ……」

「何がおかしい？」

突然笑っている、ビーストマンに不思議に思う。

「まさか、こんな程度でオレ様を倒したつもりか？」

「こんな程度？」

「オレ様の本気を見せてやるぜ！！」

立ち上がり、雄叫びを上げる。

「うぉぉぉぉぉ！！！！」

まるで、覚醒したかの様にどんどん力が沸き上がる。
傷が癒えてから、姿が変わる。見た目はビーストマンだが、異形な姿だ。

「何だ……！」

そう言った時は既に遅かった。

（速い……今までのスピードとは比べ物にはならないくらいだ）

アルカディアスブレードで防ぎながら、ビーストマンの猛攻に耐える。

先程までの速さと威力は嘘みたいだ。

アルカディアスブレードで防ぐも、所々に傷が出来ている。

「オラ！！」

ザシュ！！

ビーストマンの爪がセレナードの頬に傷ついてから、血を流す。

「……」

目を閉じてから、集中する。

動きが速い……速さでは敵わない。

落ち着け……速さに惑わさせれるな……

そしてーーー

「ぬぅ……」

「……」

僅かな隙をセレナードが防いだ事によってビーストマンは少し顔を歪めながら、セレナードを見ていて、剣と爪がぶつかり合う音が部屋全体に響いた。

「もうすぐだ」

「いつまで、防いで……」

防戦一方のセレナードに呆れ半分だったビーストマンは爪を使う。

パキーン！！！！

両腕が切断、破壊された。

「こんな程度で勝ったつもりか！！！！」

力を使い、傷を癒すも再生できない。

「再生出来ないだと！？馬鹿な！？」

「これで終わりだ」

再生できない事に驚愕している。セレナードは目を開いてアルカディアスブレードを解除してからエネルギーを溜める。

「な、何故だ！？何故、回復出来ないんだ！？」

「自分で考えろ！！シャイニングオーバーロード！！」

光の極太いレーザーを両腕から放たれビーストマン事、包み込んだ。

「ガハア！！！！」

シャイニングオーバーロードをもろに喰らい、壁に叩き付けられて、地面に落ちる。

「最後の答えだ。なぜ、貴様がここにいる？貴様の裏側に手を引いている奴は誰だ？」

ゆっくりと近づいてから、睨み付けるかの様な眼差しで、ビーストマンを見下ろしている。

「誰が教えるかよ！！！！テメェも道連れだ！！！！」

ビーストマンは敗北してから、セレナードはビーストマンの動きに警戒する。

「自爆プログラムを発動するつもりか！！」

ビーストマンは自爆プログラムを発動するも、セレナードはバリアを展開してから、自爆プログラムの爆風を防いだ。

「消えた……あの姿は……いったい……？」

バリアを解除してから、ふと考える。ビーストマンのあの姿に、身体能力の向上全てにおいて驚くべき事だ。

（それに……私とフォルテ以外にも、“現実世界”にネットナビがいた何て……）

信じられなかった。セレナードとフォルテ以外にも、この世界、しかも現実世界にネットナビが存在していた事に。

（考えられる事は一つ……確信はないが、裏で陰謀を図っている連中達がいる……）

何かしらの陰謀が隠されている事が、だが、今はそれは後回しだ。

「！」

セレナードは後ろを振り向く。

「貴様でも悩むんだな……」

「フォルテ……なぜ、ここに？」

そこには、フォルテがいた。

「庭園に響かせていたあれだけの雄叫びに、爆発音だ。気づかない奴はいない」

フォルテは嘲笑いながら、セレナードを見る。

「戦闘はしていたな……誰とだ？」

「話したら、長くなる。それでも良いですか？」

「……ああ」

真剣な眼差しで、戦闘状況を伝えた。

ビーストマンと名乗るネットナビと戦った事や、覚醒した事を全て簡潔に話した。

「貴様の話はわかった……先程の敵は何かしらの関連があるとの事か……」

「推測です。……まだ、ハッキリとはわかりませんが……」

「……」

推測なら、わからない点が多い。
今は、考えても無駄みたいだ。

「行きましょう。フェイト・テスタロッサ達の手助けに」

「……」

セレナードの手助けに、フォルテの表情が強張る。

「行く必要はない」

「フォルテなら言うと思いましたけど、理由は？」

「オレは人間の手助けは絶対にしないが、ほんの少しはしてやらなくてもない」

セレナードは意外そうに少し驚く。
フォルテはただし……と言葉を続ける。

「オレは、そのような行動をしても人間の優しさに触れたり、信頼と絆を信じるつもりはない」

「……フォルテらしいですね」

「……さあな」

こんな面倒くさそうな口調になりながらも、行くつもりだ。
セレナードはフロートで浮きながら、スピードを上げて、部屋を後にする。

「……」

眼を閉じてから、少し考え事をした後に直ぐに移動する。
フォルテは何を考えていたのかは、誰にもわからない。

第１６話　決戦（後書き）

ムラサメ
「最近疲れた」

セレナード
「どうしましたか？」

ムラサメ
「休み期間が長すぎて講義に慣れない」

セレナード
「大学生の夏休みの期間が長かったからそうですよ」

フォルテ
「慣れろ」

ムラサメ
「いきなり酷いな」

フォルテ
「慣れてしまえば、講義も大した事はない」

ムラサメ
「そう簡単に休みから慣れたら、苦労はしないって……」

フォルテ
「……」

セレナード
「今回はここまでです
次回も宜しくお願いします」

第17話　答え（前書き）

ムラサメ
「時間がだいぶ掛かりました」

フォルテ
「理由は聞かない」

セレナード
「それより、始めますよ？」

ムラサメ
「お願いします」

フォルテ・セレナード
「「……魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ（始まります）」」

第17話　答え

フェイト達は、フォルテとセレナードに大量の、傀儡兵を任せてから、最下層まで急いでいる。

「大丈夫かな……フォルテ……」

フェイトは少しばかり、不安を感じている。
入り口だけでも、傀儡兵が相当いるから苦戦していると考えていた。
セレナードも、フォルテと同様に、大量の傀儡兵を残しているため、苦戦していると思っていた。

「大丈夫だって……アイツは口が悪く、無愛想な奴だけど、実力は本物だよ
セレナードの実力は全くわからないけどね」

アルフは、フェイトを励ましていた。
フォルテは無愛想な奴だと、決めているが、少なくとも、実力は認めていた。
だから、フォルテとセレナードがフェイト達に追い付いて来てくれると信じていた。

「……それに、仮に追い付いたとしても、無事ではない。あの数相手にただではすまないよ」

クロノは状況を冷静に分析していた。

「フェイト！あれ！」

アルフは、指を指して傀儡兵を見定める。

「大きい……先程までとは、比べ物にならない位だ」

ユーノは愕然とする、時の庭園に侵入してから、傀儡兵を倒してきたが、ここまで大きい傀儡兵は見たことない。

（やるしか……ないんだ！母さんに会うために！）

フェイトは巨大な傀儡兵を相手に、怯む所か、寧ろ、図体は大きくても、負ける気は全く無いという雰囲気を醸し出していた。

バルディッシュを、強く握り傀儡兵を見定める。

なのは達も、フェイトの変わった雰囲気に反応してから、デバイスを構える。

「……下がっていろ。貴様らでは、アレには勝てない」

その言葉を聞いた時には、全員が戸惑う。

後ろを振り向いたら、あの人物がいた。

「……待たせたな」

誰にも聞こえないほど、小さな声で囁きながら、フォルテがいた。

「来てくれたんだ……フォルテ……！」

「……私もいますけど……」

「セレナードも無事だったんだ」

少しだけ声で呟きながら、セレナードもいた。

「さて、片付けだ」

ダークアームブレードを展開し、剣を握り、フェイト達の前に一瞬で現れてから、目にも見えないほどの剣捌きで、巨大な傀儡兵を斬る。

傀儡兵も、ワイヤーやらで剣を防いでいるが、フォルテの速さに全くついていけない。

体格差では、巨大な傀儡兵に分があるが、それを凌駕するかの様な動きで、追い込ませている。

（アレで……決めるか）

わざと距離を離れて、剣を向ける。

なのは達は、理解できずに？を浮かべる。

あのまま行けば、倒せるはずなのに、わざと距離を離れた。

何がしたいのかが、全く理解出来ない。

（アイツ……何を狙っている……剣からでは、遠距離は出来ないハズだ）

クロノは至極当然に、考えている。

素人でもわかる。剣は遠距離戦には不向きな武器だ。

なのに、なぜその様な真似をするのかが全くわからないでいた。

「ダークネスソニックブーム」

離れた位置から、漆黒の真空刃を飛ばしてから、傀儡兵に直撃する。

そこから、静寂な空気が流れていた。
真空刃が、確かに直撃したが、斬られた後が全く無い。
次の瞬間ーーー
完全に切れ目が入り、巨大な傀儡兵が爆発してから、破壊する。
「……哀れだな」
その傀儡兵に慰めの言葉を述べているかの様に、哀れな瞳で、呟いた。
「……プレシア・テスタロッサ……こんな程度でオレの足止めしたつもりか？
くだらないな」
プレシアが仕掛けた傀儡兵相手に、無傷で、息一つ上げていない。
それどころか、そんな程度で、足止めをしたつもりと言わないばかりに、見据える。
「本気でオレを止めたいなら、今の倍以上は増やせ……それでも、オレを止めることは不可能だがな」
まだまだ余裕で、しかも倍以上でかかってこいと言わないばかりの口調でフォルテが呟いた時に、セレナードを除く、フェイト達全員が戦慄を覚える。
（フォルテ……何で、そんなに強いの……）
フェイトは未だに、フォルテの強さに疑問に戸惑いを隠せない。

（そんなに強いなら、私達の手助けもしてくれるはず……それなのに、全く手助けすらしない）

普通なら、そう考えるのが、常識だ。強者は弱者に手助けする、それなのに、フォルテはそれをしない。

手助け等、フォルテにはあり得ない事だ。

「……何をしている。貴様は用事があって、ここまで来た……下らない、考えはするな」

「わ、わかったよ！」

フォルテの指摘に、焦りながらもフェイトは頷いた。

地下の最下層を目指して、再び足を動かし始めた。

地下の最下層

「時間がない……」

プレシアの手元には、九つのジュエルシードと今は亡き存在アリシ

ア・テスタロッサがいるケースを見ていた。
「もうすぐ、全てが終わる……」
そう言いかけた時に、一体の傀儡兵が破壊された爆発音が響き渡る。
「来たわね……」
プレシアは、呟いた。
クロノに、そして予想外な人物がいた。
「フェイト……！何で、来たの？」
フェイトの隣には、使い魔のアルフがいた。
フォルテもいるが、正直どうでも良さそうだ。
「私は、母さんの笑顔が見たかった……！」
予想外な人物に驚きながらも、フェイトはプレシアに近づいた。
ゆっくりと、そして確実に。
「でも、映像で見た母さんの笑顔は、とても辛くて悲しそうだった……。私は、母さんに笑って欲しかった。本当の笑顔が見たかった……」フェイトは少しずつ声を大きくする。
互いに、微笑んだ。
「私は本当に幸せ者ね……嫌ってもなお、フェイトは私の事を愛してくれている」
近づいてくる。その際に、クロノがデバイスＳ２Ｕを使い、魔法を

放った。
「本当に空気が読めない馬鹿だ……ＫＹ」
クロノの態度に、フォルテは皮肉ある声で、はっきり聞こえる様に呟いた。
「さようなら……幸せに生きてね……フェイト……」
プレシアは周辺に雷を放ちながら、地面を砕いた。
ジュエルシードとアリシアのケースと共に、落ちていく。
落ちる先は、虚数空間。
魔力を無効にして、重力の影響で下へと落ちていく。
落ちたら、最後だ。プレシアは自らの最後を迎えていたのだ。
「母さん！」
フェイトは叫んだ。瓦礫で崩れていく、最中で出来る限り手を伸ばした。
「待て……貴様は、死ぬぞ？死にたいなら、オレは止めたりはしない」
「え……？」
フェイトは下を見た。
バランスが不安定だ。
後少し、遅かったらフェイトは死んでいたかもしれない……。
「貴様は、プレシアに未来を託された。ならば、ここで死んだら、

裏切るだけだ……オレらしくないな……」

「ごめん」

フェイトは顔を下に向けてから、謝る。

クロノはエイミィからの通信で、時の庭園が崩壊していると連絡を受ける。

「フェイト・テスタロッサ！！アルフ！！脱出するぞ！！」

クロノは叫ぶ。

フェイトとアルフはそのまま、走り出した。

「……」

フォルテは虚数空間を見ていた。プレシアの最後を眺めていた。

その後、その場を浮きながら、フロートで移動する。

第17話　答え（後書き）

フォルテ
「後何話だ？無印は」

ムラサメ
「後2話位だ」

フォルテ
「そうか……」

セレナード
「頑張ってください」

ムラサメ
「頑張ります」

セレナード
「今回はここまでです。次回も宜しくお願いします」

第１８話　事件終結（前書き）

ムラサメ
「最新話投稿しました」

フォルテ
「早いな……」

セレナード
「そうですね」

ムラサメ
「何か、早く出来上がったから」

フォルテ
「……」

セレナード
「魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第１８話　事件終結

アースラ

「庭園崩壊終了。全て、虚数空間に飲み込まれました」

「次元震停止します」

「断層発生もありません」

局員が、時の庭園の崩壊の報告をしていた。

◇◆◇◆◇◆

時の庭園から脱出してから、医務室に、なのは、ユーノ、事件に関連していたフォルテ、セレナードがいた。目立った外傷は特にない。

医務室に開かれた音がした。

「何のようだ？ＫＹ執務官？」

「クロノ・ハラオウンだ。いい加減、覚えろ」

「断る」

無愛想な態度で、クロノに返事する。

「ゴホン……キミ達二人は拘束はしない……したら、上層部と時空管理局を潰す気だからな」

「人間が権力を使うなら、力で捩じ伏せる」

咳をしてから、フォルテとセレナードを拘束しない理由を話す。

「後は、ジュエルシード事件の際に、キミ達二人の戦闘映像は全て消した解析もだ」

「後で、録画して解析するという事はしませんね？」

セレナードの指摘に、クロノは少し慌てる。

「す、するわけないだろ！？（そんな事は……しない！したら、あの協力条件を破棄した事になる！！）」

全力で否定する。

フォルテとセレナードが協力する条件を思い出した。それを破棄したら、どうなるのかを考えたら、顔が真っ青になる。

なのは達は状況を掴みきれずに、唖然とする。

「話を変えるぞ……フェイト・テスタロッサとアルフの件だ」

「……」

「彼女達は、護送室にいる。今回の事件の重要参考人だ」

「「そんな……」」

なのはとユーノが非難の声を上げる。

フェイトとアルフのがなぜ、事件を解決したのに護送室にいるのか、わからないが、クロノが補足する。

「事件に関わっているからな。いくら、プレシア・テスタロッサの手伝いでも、罪は消えないが、裁判はほぼ無罪だ」

「……今頃、フェイト・テスタロッサとアルフは拘束……か……」

乾ききった、声でポツリと呟いた。

「意外だな。心配しているのか？」

「……」

目を閉じてから、壁に寄りかかる。

「……オレとセレナードの名を、時空管理局に広めるな。最後に言いたいことは、それだけだ」

目を開いて、少し忠告するかの様な言葉を使う。

「それも、わかっている。ゆっくり休めよ？」

クロノは退出する。

セレナードは少し意外そうな、表情を浮かべながら、フォルテを見ている。

「フェイトちゃん……」

「なのは、気持ちはわかるよ。だけど……彼女達は……」

「別に会えないわけでは、ないですよ？」

「「え？」」

セレナードの発言に、なのはとユーノは振り向いた。

「今は会えませんが、いつか必ず、会えると信じたら会えますから。あなた達に対する、慰めですね……完全に」

ハハッとセレナードは軽く笑みを浮かべながら、なのは達を見る。

「慰めではないですよ？ありがとうございます。セレナードさん！！」

「どういたしまして」

なのはは少し吹っ切れた表情になり、満足している。

セレナードも、優しく返事をする。

フォルテは壁に寄りかかったまま、静かに目を閉じた。

ユーノはそんな、フォルテの態度を見ている。

（彼が、なのは達と仲良しになるにはまだまだ時間がかかりそうだね）

この言葉は、決して表に出さずに心の中に、しまっておくようにとユーノは決めていた。

翌日アースラにて

「事件解決していただき本当にありがとうございました」

リンディがアースラ代表をしてなのは達にお礼を述べた。
セレナードとフォルテはその場にいない。
なぜなら、“大した事はしていません。活躍したのは、あなた達です。”と言って、お礼を断ったそうだ。
なのは達が、不思議に思ったが、本人達がそれを望んだから仕方ないと判断してから、これ以上は何も言わなかった。

第１８話　事件終結（後書き）

ムラサメ
「ついに、無印編も最終話目前だ」

フォルテ
「聞きたいが、Ａ'Ｓ編はするのか？」

ムラサメ
「もちろんです」

セレナード
「日常編もありますよね？」

ムラサメ
「一応ある」

フォルテ
「そうか……」

セレナード
「今回は、ここまでです。次回も宜しくお願いします」

第１９話　名前を呼んで（前書き）

ムラサメ
「今回で無印編最終話です」

セレナード
「作者さんの事ですから予想通り遅くなりましたね」

フォルテ
「……何時もの事だろ。遅いのは」

ムラサメ
「酷！？でも、否定出来ない」

セレナード
「では、魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まります」

第１９話　名前を呼んで

それから、フェイトとアルフの二名は、アースラに滞在する事になり、なのはは家に帰る。
ユーノは自分がいた世界を探すためにアースラに残ったが、なのはが暫く滞在していいと言って地球に帰った。
フォルテとセレナードはアースラに残らなかった。
本来の世界を探す予定は全くない。なぜなら、管理局の態度が気に入らないと判断してから、なのは達と同様に地球に戻った。

実際、住む場所がフェイトの家しかなくて、フェイトがいないため高町家に居候という形になった。
フォルテは納得いかない部分もあったが、仕方がないと渋々ながらも居候する事になる。

「それじゃあ、ゆっくり話ていいよ」

現在、海鳴市にいる。
アースラで、したらどうだ？という考えもあったが、余りにも殺風景なため、全体を見渡せる海鳴市にしたら？という意見があり、賛成した。

そもそも、なのはの住む地球には管理外世界だ。管理局は侵入する事は許されない。
フェイトは再び、アースラに戻る必要がある。
だから、最後の挨拶の意味でも、なのはとフェイトの二人だけの時間を与える。
フォルテとセレナードやクロノとアルフは、二人から離れた位置にいる。

「話したい事があったけど……色んな事があって忘れちゃった」
二人は、談笑しながら橋の上で会話している。
「……そうだね。私も忘れていたよ」
「だけど、嬉しかった」
「？」
なのははフェイトと顔を向き合わせる。
「真っ直ぐ向き合ってくれて」
「……」
なのはは笑顔になる。
「私ね、フェイトちゃんの友達になりたいんだ」
「わ、私でいいの！？友達の作り方も、全く知らないから」
フェイトは少し慌てる。友達の作り方を、知らないのは、プレシアからの仕打ちを思い出したからと思う。
悲しみを知っているが故に、友達が出来ない事はなのはも知っている。
「簡単だよ……友達を作るのは！」

「簡単？」

「名前で呼ぶの。最初はそれだけで、いいの。キミとか、あなたではなくて、ちゃんとした名前で呼ぶの」

顔を上げてから、なのはが今まで友達を作った経験から、友達の作り方をフェイトに教えた。

「私はなのは！高町なのはだよ！」

「な……のは……」

「うん！」

「なのは……！」

「うん！うん！」

ゆっくりでも、名前を呼んでいる。

互いに、抱き合った。

「うう……ひっく……」

なのは達から、離れた位置でアルフは、大量の涙を流している。

「……」

「……何で、フェイト・テスタロッサよりも涙量が多いのですか？」

セレナードは、アルフの表情を見てから、少し引いた。

フェイトも泣いているが、それを超えていた。
フォルテは、相変わらずの無愛想な態度、それ以前に、全く興味が無いかの様に振る舞う。
「だって……なのはって子は、すごく良い子だし、フェイトも喜んでいるから……」
使い魔は、元からマスターとの精神リンクが繋がっている、マスターであるフェイトの感情が直接伝わっているからだ。
（あれが、人間ですね……）
（……）
セレナードは、染々と見ていたが、フォルテは興味無さそうだ。
その後、二人は互いにリボンを交換した後、二人が戻ってきた。
「そろそろ、アースラに戻るよ」
クロノは言った。
暫くは会えない、本当の意味で最後だ。
フェイトは不安な表情を浮かべる。
「……」
一度、フォルテと目を合わせたが、すぐに目を反らす。
会わせ辛いと感じてしまった。

「オレが決めたわけではない。貴様が選んだ道だ。
……貴様がそれを望んだなら、それでいいのではないのか？」
フォルテはフェイト・テスタロッサが選んだ道の内容には興味はない。
本人が、その道を貫き通すなら、これ以上は何も言う事や決める権利はない。
例え、その道が間違いか正しいのかはフォルテが決めるわけではなく、本人が決める事だ。
「……気休め程度だ。気にする必要はない」
「ありがとう……フォルテ……」
フォルテの言葉が聞こえたのか、フェイトは小さい声で言った。
クロノは魔方陣で、転移する準備をしている。
「何をしている！そろそろ行くぞ！」
クロノは少し不機嫌になっている。
アルフも中にいるため、フェイトは急いで転移魔法陣の中に入る。
魔法陣が消える。
なのはは、魔方陣が消える瞬間まで手を振っていた。
「行こう！なのは！」
なのはの肩の上に乗っていた、フェレットもといユーノが言った。

なのはは家に向かって、走り出した。

「なのはが私達二人を高町家に受け入れてくれるのは構いませんが……

なのはの家族にはどう説明しますか？」

「……あ」

セレナードのさりげない一言で、なのはは、一瞬だけ固まったかの様に完全にフリーズする。

「……どうやら、考えていないようだな」

更なる追い打ちをかけるかの様に、フォルテはそんななのはに指摘している時のフォルテの表情は、完全に呆れている。

（ど、どうしよう！？全く考えてないよ！？）

（まずは、家に帰ってその後考えよう）

念話を使いながら、ユーノと会話し、フォルテとセレナードをどう説明するのかを考えていた。

「何とかなるでしょう……多分」

「……投げ捨てたな」

諦め半分になりながら、投げ捨てている。

住む場所は、野宿でも雨凌ぎさえ、出来たら後は問題なかった。

「適当に伝えてください。私達は後で帰ります。
なのはは、急いで帰った方がいいですよ？」
動かないなのはにセレナードは忠告するかの様に伝えた後、なのは
は再び動き始めた。
ユーノと共に走り出した。

「私達二人ですね」

「……貴様は人間に対する適応力が高過ぎる」

「それを言うならフォルテの場合は適応力が無さすぎですよ？」
なのはもユーノもいないこの場所で、フォルテとセレナードが話し
ている。

フォルテとセレナードは様が済んだのか、その場を離れる。
そして、再び顔を上げてから、空を見た。

「……電脳世界にはここまで空が青かったのはあり得そうもないな」
まるで、独り言を呟いているかの様に話している。
セレナードはそんなフォルテを不思議そうに見ている。

「……変な事でも言ったのか？」

「いいえ……」

視線を戻して、セレナードの方を見る。

「……これからはどうしますか？」

「今はそんな事を考える意味はない。そういう状況になったらその時考えればいいだけだ」

無愛想な表情で、今後の展開を答える。

そういう状況になったらその場で考える正にフォルテらしい答えだ。

止めていた足を再び動き始める。

自分が決めた道を貫き通すかの様に。

第１９話　名前を呼んで（後書き）

ムラサメ
「最近ＴＰＰの話題が沸騰している」

フォルテ
「政府の爺やオイボレ達の事だろ」

ムラサメ
「フォルテは政府に喧嘩を売っているね」

フォルテ
「……どうでもいいが、ＴＰＰがそんなに問題なのか？」

ムラサメ
「二次創作が書けなくなるらしい」

セレナード
「日本がＴＰＰに参加しただけで二次創作が書けなくなるのですか？」

ムラサメ
「そういう事」

セレナード
「おかしいですね。もし仮にそんな法律が出来上がったとしても機能するわけがない、そもそもそんな法律を守る人はいない気が……」

ムラサメ
「ハッキリ言ったが実際はオレもそう思う」

セレナード
「二次創作はニ〇ニ〇動画やＹ〇〇Ｔ〇ｂ〇にその他もろもろの作品は世界中に広まっている日本だけでも数十万人以上、世界中に二次創作やそれらは広まりつつあるのに、日本がそれに参加しただけで二次創作関連の人が罪に問われる事はない」

ムラサメ
「罪にするならある意味社会的以上の問題になる。そもそも、ＴＰＰは世界各国で経済に関する話し合いをする公の場だ。二次創作は引っ掛からない」

フォルテ
「反乱がある。コスプレも同様だろ？」

ムラサメ
「二次創作と同じで表現の自由に関係しているため、罪にはならない」

セレナード
「大分脱線しましたね。本編の話でもしますか」

ムラサメ
「まずは無印編が完結した」

セレナード
「次は日常編ですか？」

ムラサメ
「日常編とA'S編ですね」

フォルテ
「こんな作者だ。今回で無印編が終わったが、日常編とA'S編も見てくれたら、ありがたい」

ムラサメ
「物語はまだまだ続きますので宜しくお願いします」

セレナード
「次回も宜しくお願いします」

第２０話　安らぎと苦痛（前書き）

ムラサメ
「久々に更新です」

フォルテ
「今回は日常編か」

セレナード
「そうですね」

ムラサメ
「とにかく始めるか」

フォルテ
「……魔法少女リリカルなのは～最強と呼ばれた闇の戦士～始まるぞ」

第２０話　安らぎと苦痛

ジュエルシード事件が終わってから、一週間が過ぎる。
なのはの生活にも、一時期の安らぎの時に戻る事以外で変わった点が二つある。
フォルテとセレナードの二名が高町家に居候という形で生活する。
その後に関する、説明は適当に嘘と真実を混ぜ合わせた話を説明したりして、誤魔化したりしながら納得していない部分もあるが、何とか納得した形になる。

「はあああ！」

「……」

高町家の道場で木刀を使いながら組み手をしている。

「なのはは渡さないぞ！」

「勝手にしろ。あんなお人好しはいらん」

「貴様！なのはを侮辱したな！」

「……なぜオレがあんなお人好しを貰う価値がある？」
辛辣な言葉となのはを完全に侮辱したフォルテに恭也は怒りを覚える。
怒りに身を任せて、隙が無いくらいの連続に木刀を振るう。速さと正確さもあり、並の強さでは防がれない。

「頭に血が上ったか。短気だな貴様は」

背後から木刀を首に当てている。
あれだけの速さを全て防いだのかと疑問に感じる。
「わざわざ敵にどうやってそれを凌ぎきったのかを話すほどオレはバカではない」
首に当てていた木刀を引っ込めてから、床に置いた。
その後、何も話す事なく立ち去る。
「父さんからも言ってやりなよ！アイツ！なのはの事を！」
「言いたいが流石に無理だね」
士郎はどこかしら諦めている。
話し合いをしても、直ぐに辛辣した言葉と態度で接しているためあれは変えようがないと判断したからだ。
（……彼は誰も信じず、誰も頼らない。自分以外は何も信じていない……）
フォルテの独特的なオーラの正体を見抜いた。
この事は誰にも話すべきではないと判断した。
「彼はまだまだ本気を出していない……それどころかかなり手を抜いている」
「あれで本気ではない！？まだ実力を隠しているのか！？」
恭也はフォルテと組み手をして、恭也は何本か狙える部分があった

が全てを先読みされているかの様に防がれているため、本気を出しているのかと考えたが、手を抜いていた事に驚いた。

「恐らくね……彼は本当に強い。口で説明するのは難しいが、戦う術を全て戦場で身に付けている……剣の筋はどの剣士にも該当しない我流だ」

「そこまで強いのか……アイツは」

恭也はフォルテの強さに驚きはしたが、士郎の説明を聞いてから納得している。

その後も、恭也は汗を拭いてから道場を後にした。

「……」

道場を後にしたフォルテは次に何をするのかを考えている。

セレナードは今はいない。

今頃、人間の手伝いをしているのか。等と考えていたが、フォルテにはどうでもよかった。

「……どうしたの？」

「来たか……お人好し……」
「お人好しじゃないよ！なのはだよ！な・の・は！」
「どう呼ぶのかはオレの自由だ」
「話したい事があるんだ……」
魔法関連の日課を終えたなのはに話をしている。
偶然出会ったのか、なのはを見て感情を表に出さないで、内心イライラしている。
「……用があるならさっさと言え」
「何で関わりを持たないの？」
「そんな下らない事を聞きに来たのか……言っておくが関わりを持ったら何が生まれる？」
「一人ぼっちはすごく寂しいよ……家族も誰も関わりを持たないで、ただ一人で孤独に過ごすのがどれだけ辛いのか」
なのはは一度経験した事がある。一人ぼっちがどれだけ寂しいのか、他人に認められないのがどれだけ辛いのか。
フォルテが高町家の家族との関わりを持たない事を知っているため、なのははフォルテの事が余計に寂しく見えた。
「……如何にも都合がいい人間の言い訳にしか聞こえない」
「都合がいい言い訳ではない！何で誰にも関わりを持たないの？ねえ！何で！」

「そういうお人好しな貴様が嫌いだ……はっきり言ってやる目障りだ。うるさいくらいにな」

フォルテはなのはの話を聞くつもりはないのか、フロートで浮いて一瞬でなのはの前から姿を消す。

フォルテは誰かとべったりとくっつく事を凄まじく嫌っている。

なのは見たいなタイプがいい例だ。徹底的なお人好しで、しかも他人の過去を追及し、皆と共感し分かち合わせる部分がフォルテが最も嫌っている部分だ。

「……」

なのははただ呆然と眺めている。

話せば誰もが分かり合えるそう考えていたが、フォルテの前ではその事は無に等しい事を知る。

（力に慣れないのかな？私では？）

（なのは……気持ちはわかるけど、フォルテの態度をよく考えて見ようよ）

念話でユーノと会話をしている。

自分に何が出来るのか、どうやったらフォルテのあんな態度を変える事が出来るのか、を考えていた。

（ユーノくん……それは一番わかっているよ……でも……）

敵わないとわかっている。

それでも、なのはは一人孤独で過ごしているフォルテが気になる。

でも、人間の言葉を信じていない。
関わりたく無いが故だろう。
なのははただ呆然と眺めている。

「……」

フォルテは廃墟ビルの屋上にいる。
そこから、眺めている。人間の存在を。

（つまらん奴らだ。あの馬鹿も同様にな）

なのはの態度や、高町家の態度を考える。
あの一家は本当に目障りすぎる。
しつこい位だ。何度も何度も同じ事を聞いてくる。
だからこそ人間は不愉快でもあり理不尽過ぎる存在だ。余りにも脆くてひ弱な生き物でもあり、一人孤独に耐えきれない存在でもある。

（……オレ自身の痛みを知り共感したとしても奴ら人間には理解するわけがない）

それどころか、批判した態度になる。危険すぎる存在と判断される。
……分かりきっている。

オレの存在自体が人間に嫌われている。

『やはりまだ人間が許されないのか？』

『ファルザーか……電脳世界ではロクに話す事は無く黙り続けていたが、なぜ現実世界で会話が出来る？』

『主の力が強大すぎる。我の力を完璧に使いこなす強大すぎる力が原因だ。その力は時には災厄を呼ぶ』

『災厄か……オレが現実世界に来ただけで十分災厄な存在だがな』

ファルザーと念話している。
フォルテの存在自体がファルザーにとって災厄に匹敵するらしい。

『……そろそろ時間だ主』

『随分長い話だな』

ファルザーとの念話を打ち切る。
実際ならここまで話すつもりはないが、なぜか異世界に流れ着いたら念話だが話せる。

「……」

再び、人間を見下ろしている。
何時も通り、人間はザワザワと騒いでいる。
気にさわるのかどうかは理解できないが、とにかく人間の存在が気に入らない事にはこの世界にたどり着く前から変わらない。いや、その心情だけは変わるつもりは一切ない。

ただ一人浪々と過ごしている。
誰にも邪魔される事なくたった一人で過ごす事がフォルテの安らぎかもしれない。

余談だが、高町家に戻った直後なのはを侮辱した事で恭也は黒いオーラを出しながら、フォルテを見る。

「オレとお話しないか？」

誰もがそれを見た時には逃げ出したいが、フォルテはそんな恭也から放たれる黒いオーラに表情一つ崩さない。

「弱者風情が強がるな……かえって見苦しいだけだ」

動じる所か、フォルテの眼中にそのオーラが眼中にない。

「そこまでするなら容赦はしない」

「上等だ！！！！！！道場まで来い！！！！！！」

「楽に死ねると思うな。貴様を完膚無きに叩き潰す！！！！！」

フォルテと恭也は道場まで足を運んだ。

道場からは、恭也の断末魔が聞こえた。

「つまらん見えを張るな。目障りだ」

辛辣な言葉を残した後、道場を後にする。

道場で倒れているのはボロ雑巾の様に叩き潰され、気絶している恭也の姿だった。

第２０話　安らぎと苦痛（後書き）

ムラサメ
「レポート課題が死ぬ……」

フォルテ
「パワーポイントを使い発表したらしいな」

ムラサメ
「あれは緊張した。一気に疲れが溜まった」

セレナード
「……お疲れ様です。作者さん」

ムラサメ
「レポート課題やパワーポイントを使った発表も終わったから多少は楽になる」

フォルテ
「……意外ときっちり課題をしている事は珍しいな」

セレナード
「頑張ってください」

ムラサメ
「もちろん！！」

セレナード

「次回も宜しくお願いします」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9332s/

魔法少女リリカルなのは〜最強と呼ばれた闇の戦士〜

2011年12月8日00時54分発行